幼兒の教育

第三十八卷　三月號　第三號

東京女子高等師範學校內
日本幼稚園協會

廣島文理科大學教授 文學博士 久保良英著

新刊

兒童の精神構造と指導

菊判洋綴紙數三百頁 定價金二圓八十錢 送料廿一錢

本書は心理學上より兒童の精神構造を科學的に解剖し、體係を立て以て兒童教養の根本義を確立せるものである。兒童の教養は次期の國家の消長を決するものであるが、特に現今我國は非常の時局に立ち何事にも國民總和の力を以て當るべきの秋である。著者はこゝに感ずる所あつて、世の教育家父兄の爲に特に本書を著したのだ。先生は我邦心理學界の泰斗で、本書は其深奥なる學問と豐富なる經驗との完全なる融合である。左に其大綱を擧げれば……一幼兒の精神構造 二玩具の選び方 三言語と文字 四交友についての注意 五問題の子供の導き方 六家庭に於ける知育 七美の情操陶冶 八道德教育 九宗教教育……一般教育家は勿論一般識者の必讀を望む。

東京高等師範學校教授 文學博士 小野島右左雄著

心理學要說

菊判紙數四百頁 定價二圓五十錢 送料二十一錢

教育の基礎となる新しい心理學說

文檢要書

心理學の問題は嘗ての機械說より生氣說、準機械說等幾變遷を經てゐるが、體制說に至つて今や其全面に涉り百八十度の大回轉を示してゐる。之は人間科學の諸領域に於て重大なる進歩と新らしい分野の開拓とを意味するものである、斯樣な時期に當つて著者は本書に於て單なる紹介や學說の羅列をさけ、專ら見方を敎へ考へ方を說き見透しを與へようとしてゐる。しかして全卷を通じて一貫するに其獨特の理論を以てし、傍諸家の說にふれ一方其內省よりして東洋思想の色彩も又濃厚であり、敎育家特に文檢受驗者に適したものであることを信ずる向著者は「われ〳〵の精神生活を現代の心理學の成果に基づいて叙說しようと試みたし」と本書の卷頭に述べてゐるが、此の意味に於て又一般知識人の必讀を俟つものである。

發行所 東京市牛込區辨天町一七四 中文館書店 振替東京三一二五 電話牛込八三三番

保姆生徒募集

一、募集人員　五十名

一、出願期限　二月一日ヨリ受付

規則及入學案内ハ三錢切手ヲ同封シテ請求セラル、カ又ハ山手線目白驛前目白幼稚園ニ就キ承合セラレタシ

淀橋區下落合三丁目一、三八八

東京目白保姆學校

電話落合長崎二五五九番

生徒募集

募集人員　七拾名

出願期限　自二月一日　至三月末日

○入學手續ヲ簡易ニ改メタリ

○入學試驗ヲ要セズ　提出書類ニヨリ詮衡ノ上直チニ許可書ヲ送付ス

○無試驗檢定ニヨリ保姆免許狀ヲ受クル特典アリ

○寄宿舍ノ設備アリ

規則書入學案內ハ三錢切手封入申込マルベシ

東京市品川區大井原町五二〇八（省線大井町驛ヨリ城南バスニテ原停留場下車二分）

東京昭和保姆養成所

所長　土川五郎

顧問兼講師　東京女子高等師範教授　倉橋惣三

平安女學院保育科

修業年限二箇年・保姆及母として
の學習　實習、研究

（入學案内要三錢切手）

保姆・小學教員無試驗檢定資格有

第一學年　參拾名募集

京都市上京區下立賣通烏丸西入

平安女學院

なほ英文科・家政科・家庭科及豫科・平安幼稚園・平安高等女學校あり

新刊

倉橋惣三作詞
小松耕輔作曲　戸倉ハル振付

日本の旗　日の丸の旗

色刷表紙四六倍判音譜及び振付
説明
定價　送料共　一冊　金參拾錢
前金（振替或は參錢郵劵）を添へ
冊數及び送先き明記申込次第直
に送本す

此の時局、幼兒兒童に何を唱はせませうか。どんな遊戯をさせませうか。本會は、今日此の新しい唱歌と遊戯とを全國の幼兒兒童の前に贈り得ることを最も欣快とするのであります。願はくは、皆さまのお力添へを俟つて、幼稚園に、學校に、家庭に、街頭に、津々浦々に、此の唱歌遊戯の流布を見るに至り得んことを。之れが本會の遠慮のない望みであります。

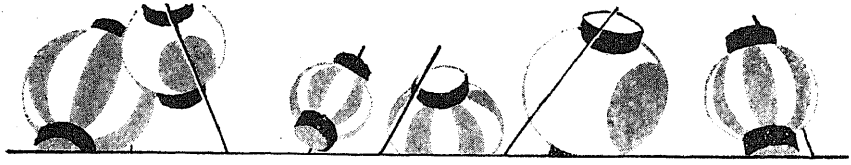
尚、此の刊行によつて得た金額は、國防費に獻金致したく、既に金百圓を獻金致しました。どうぞ此の趣旨にも御共鳴下さつて、尚ほ一冊でも多くお購求下さい。又廣くお勸め願ひます。一冊の御購買は卽ち同時に國防獻金となるのであります。若し各幼稚園が此の意味に基いて、取りまとめて御註文下さるようのことまでして頂ければ、此の上ない幸であります。そのために表紙も美しい色刷りの家庭向きにして置きました。

右本會の二つの希望を御協贊願ひます。

發行所

日本幼稚園協會

東京市小石川區大塚町三十五
東京女子高等師範學校附屬幼稚園內
振替口座東京一七二六六番



第三十八卷　幼兒の教育　第三號

——(目　次)——

口絵

巻頭(保育修了の月)……倉橋惣三(一)

お寶の島……小川未明(二)

育ての根據……倉澤剛(七)

子供黨列傳(五)……石井庄司(一三)

一年保育に就て……坂内ミツ(一四)

フレーベル賞入選手技

兵隊さん……堀田景子(一八)

繪馬……藤井君代(一九)

金魚鉢……司馬重子(二〇)

大鋸屑繪……西口志佳(二一)

母達の話題……常石貞子(二五)

子どもの體について……幼稚園衛生室(二六)

幼兒教育の文化性(五)……倉橋惣三(三〇)

ハイディ——ヨハンナ・スピリ原作——……津田芳雄譯(六八)

三版

日本幼稚園協會編

幼稚園談話集

菊版三五〇頁
定價金壹圓五拾錢

郵税
市内 金六錢
地方・北海道・臺灣・樺太・朝鮮・滿洲 金拾五錢

さきに發行せられた東京女子高等師範學校附屬幼稚園編『系統的保育案の實際』は非常の歡迎を受け、既に多數の方々により研究せられ又實施せられても居ります。就いてはその中に用ゐてあります談話につき、便宜一まとめにした書物がないかとの御要求が澤山ありますので、此の談話集を編纂發行致しました。右保育案を御使用の方は素より、そうでない方にも、幼稚園談話選集として極めて御便利のものと信じます。實際御使用のために定價も普通の市價の標準を離れて、出來るだけ廉價にいたしました。本會の趣旨のあるところをお汲み取りいたゞけば幸です

四版

東京女子高等師範學校附屬幼稚園編

系統的保育案の實際

定價金壹圓
送料金六錢

一保育案の實際は幼稚園必須の資料
一東京女子高等師範學校附屬幼稚園現行の保育の實際は各幼稚園好箇の參考
一待望の本書を全國幼稚園保姆諸君に勸む

月刊

幼兒の教育

一ケ月 金參拾五錢 送料金一錢
一ケ年 金四圓貳拾錢 送料共

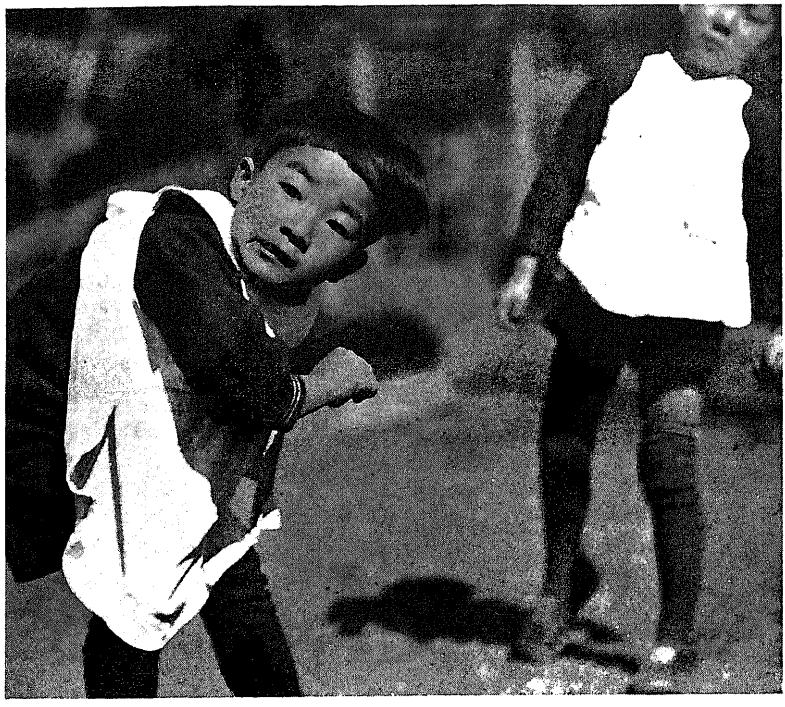
幼兒教育に關する忠實なる月刊雜誌として、眞に全國幼稚園、託兒所の方々のものたらんことを切望してゐます。

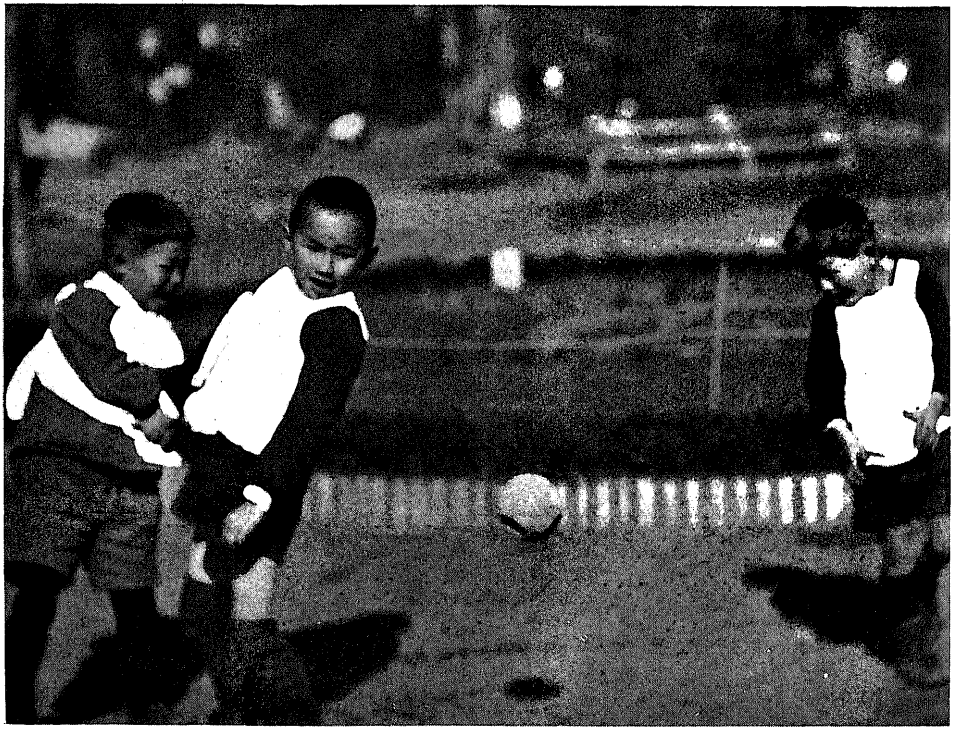
○定價及郵税を添へ本會宛直接御註文下さい。

發行所 日本幼稚園協會
東京市小石川區大塚町卅五番地
東京女子高等師範學校附屬幼稚園內
振替東京一七二六六番

ストライキ！

セイフ！





幼兒の教育

昭和十三年三月

保育修了の月

保育修了の月である。お互の幼稚園から、幾十人かづゝの、可愛いゝ子ども達が、修了式の祝ひを受けて、幼稚園から出てゆく。その子達の健康、性情、知性に輝く顔の、なんといふ末たのもしいことであらう。幼稚園關係者にとつて、最も喜ばしい月である。

しかも、その喜ばしさの中にも、ふと、かすかにかげろふ思ひは、此のよき幸福をうけない子ども達の多いことである。日本の子どもの中に、その數の方がずつと多いことである。若し此の月が、全日本の幼兒にゆきわたる保育修了の月であつたら、それは、どんなに更に廣い喜びであらう。どんなに更に大きい喜びであらう。

但しこれは、密に胸の中を通り過ぎる雲の影である。三月の日は、今修了してゆく幼兒達の上に、一ぱいの明るさに、照々たる榮光と祝福を贈つてゐる。

（倉橋惣三）

お寶の島

小川未明

春のあたゝかな日でありました。正ちやんと、ちい子ちやんが、草の芽を摘みながら、遊んでゐました。

「あ、面白いことをしようよ」と、正ちやんは、原つぱに積んであつた、砂を袋へ入れて、往來の上に運びました。すると、ちい子ちやんも、いつしよになつて、自分の袋の中へ砂を入れて、後からついて來ました。二人は、同じやうなことを幾度もくりかへすうちに、いつか道の上に小さな砂山が出來ました。正ちやんは、考へてゐましたが、

「ちい子ちやんも、何か持つておいでよ」と、いつて、自分は、お家へ行つて、椿の花と、桃の枝を折つて來ました。そして、それを山の上へ差しました。それから、小石を拾つて來て、お城のやうに、山を圍みました。

ちい子ちやんは、お人形とおままんごとの道具を持つて來ました。そして、それをお山の上へ並べました。

「ちい子ちやん、こゝに待つていらつしやい」と、お留守を頼んで、正ちやんは、またお家へ飛んで行く

と、タンクとゴム鐵砲を持つて來ました。正ちやんは、それを、ちやうごお人形の立つてゐる、頭の上へ置いたのでした。

たちまち、山は、いろ〳〵のもので、いつぱいに飾られました。二人は、赤い林檎のやうな頰に、星のやうな瞳をかゞやかしながら、これをながめて、さもうれしさうでありました。

どこからか、白いてふてふが、風に送られて來て、椿の花に止ろうとしたが、光つたタンクを見てびつくりして、逃げ去つてしまひました。

「ほほほ、馬鹿ね、なんにもしないのに」と、ちい子ちやんが、いひました。

「ほんたうのタンクと思つたんだよ」

正ちやんは、泥だらけの手をエプロンで擦りながら、雲を見てぼんやりしてゐると、あちらから、頭の禿げたお爺さんが、ニコニコ笑ひながら、やつて來ました。

ちい子ちやんは、

「なんだか變なお爺さんね」と、いはぬばかりに、道端へ寄つて見てゐましたが、正ちやんは、

「おぢいさん、何がをかしいのだい」と、いひたげな顔付をして、見上げてゐました。

お爺さんは、お山の前まで來ると、

「おゝ、出來たな。これは、これは、立派だ。また、あとで、ゆつくり見せてもらふから」と、いつて、一

人で、ニコニコして、行つてしまひました。春の日が、お爺さんの禿げに、てら〳〵と照り返つてゐました。

「面白いお爺さんだな」と、正ちやんは、お爺さんを見送りました。

「いゝお爺さんだわ」と、ちい子ちやんは、思ひました。

二人は、自分達の造つたお山を、この知らないお爺さんに褒められたので、うれしくてたまらなかつたのです。

「ちい子ちやん、もつと、なんか持つておいでよ」

正ちやんは、花や、お人形や、タンクや、庖丁や、いろ〳〵のもので飾られた、お山に見とれてゐました。

「もう私、色紙と、繪本しか持つてゐないわ」「色紙で旗を造るから、早く持つておいでよ」

と、正ちやんは、道の上をあちら、こちら歩いて、何か青か赤の珍らしい石が、落ちてゐないかとさがしてゐました。

ちい子ちやんが、ゐなくなつて、正ちやんが、一人の時です。こんごは、髭の生えた小父さんが、煙草をぷか〳〵吸ひながら、あちらから來ました。

「あの小父さんは、何かいふかしらん」と、正ちやんは、お人形を直したり、タンクを置き變へたりしてゐました。

小父さんの靴音が、だん〳〵近づきました。傍へ來ると、果して、止りました。

「坊や、それは何だな?」と、小父さんは、きゝました。正ちやんは、かうきかれると、振向いて小父さんの顔をながめたが、さあ、何といつて、答へていゝか分りません。

「坊や、何をこしらへたんだい」と、小父さんは、前より一層親しみ深く、やさしい聲で、もう一度きゝました。正ちやんは、いゝものを、面白いものをこしらへたのであるが、これを何といつて答へていゝか、自分にも分らなかつたのです。正ちやんは、たゞ顔を赤くして、だまつてゐました。

「ははゝ、坊や、でたらめを造つたのか」と、小父さんは、笑つて、煙草の吸殻を捨て、行つてしまひました。

「でたらめ?」正ちやんは、口の中でくりかへしました。小父さんに、さういはれると、たしかにでたらめだつたので、恥かしくなりました。もう、何となく、お山を飾る氣になれませんでした。正ちやんは、ちい子ちやんが、色紙と繪本を持つて、戻つて來る間に、お山をみんな崩してしまひました。

「あら、あら、正ちやんどうしたの?」

と、ちい子ちやんは、おどろいて、眼をまるくしました。

「でたらめだつて、小父さんが、いつたから」

「どこの小父さん?」

「お髭の生えた、小父さんが」

ちゝ子ちやんは、大事なお人形さんについた砂を落し、庖丁や、俎を砂の中から拾ひ上げてゐました。

この時、はじめに通つた、ニコニコ笑ふ、頭の禿げたお爺さんが、反對の方向から、返つて來ました。

「おや、おや、お寶の島はどうした。えつ、なんで、あんないゝのをこはしてしまつたのだ・・」と、お爺さんは、さも惜しさうに、いひました。

「お寶の島、お寶の島、さうだ、お寶の島だつた」と、二人は、顔を見合せました。

「自分は、名を知らないけれど、お寶の島を造つたのだ。小父さんに、さういつてやればよかつたな」と、正ちやんは、殘念でたまらなかつたのです。

お爺さんが、行つてしもふと、二人は、もうそんなことは忘れて、また、別のことをして面白さうに遊んでゐました。うらゝかな春の日の午後でした。あちらの空は花曇か、霞んでゐます。

（をはり）

育ての根據

東京女子高等師範學校助教授　倉澤剛

(一)

世に神祕なものは少くないが、人の子の育て上げられる姿ほど神祕なものは、他にはあるまい。考へれば考へるほど、神祕に、そして崇高に感じられるものは、「育て」の事實である。一體、子供は如何にして、育てられるのであらうか。

育てのはたらきには、身體の發育に向けられた方面と、精神の發展に向けられた方面とがあり、更に精神の發展についても、主として知能の開發をめざす方面と、性格の陶冶をめざす方面とがある。このうち、保育の眼目は、何といつても、身體の發育と、性格の陶冶とにあるであらう。こゝでは、身體の發育は暫らく措き、私の關心は、もつぱら性格の陶冶に向けられてゐる。子供の精神の陶冶、ここに情意的方面の陶冶について、育ての根據を求めようとするのが、私の意圖である。

(二)

一體、子供は如何にして陶冶されるものであらうか。かつては、陶冶は、教師と子供との間に、直接に行はれるものと考へられた。教師は、子供を、直接に陶冶することが出來、そして、この直接の陶冶に、保育の任務を求めようとした。つまり、個々の保姆が、個々の子供にはたらきかけて、その子の性格を高めることが出來ると、そして、それが保育の

任務であると考へられ、陶冶は、保姆と子供との、二つの人格の間のことゝ解されてゐた。

しかし、今日では、このやうな解釋は、根本から修正を加へられ、もはや保育の常道とは見られないやうになつた。今日の解釋に從へば、性格は生活により、生活を通じて、間接に養はれると說かれる。私達は、子供の生活を導き、これによつて間接に性格を養ふことが出來、そして、こゝに保育の常道があると考へるやうになつた。かやうな考へ方は、今日廣く「生活教育」の名に於て行はれ、多くの教育學者の承認するところとなつてゐる。例へば、米國のデューイが「教育を以て教師と兒童との直接の交涉と考へるのは誤解である」といひ、「生活を措いては、教育の道がない」と說いたのは、よく現代の教育本質觀を代辯したものと見られよう。

(三)

それでは、生活による性格の陶冶とは、如何なる過程を指すのであらうか。また、生活によつて、性格が陶冶されるのは、如何なる根據によるのであらうか。

生活といふのは、いつでも、何等かの環境に住み込むことである。だから、環境を外にしては、生活といふものは考へられない。從つて、生活教育の主張は、直ちに「環境による教育」の主張に、置きかへて考へることが出來る。たしかに「育て」は、環境を介して、間接的に行はれるのである。だから、育てのあらゆる問題は、この環境の問題に集注せられる。

それでは、環境とは何であるか。普通に環境といへば、子供を圍む一切の人と物とを、總括して含意するやうである。家庭や、幼稚園や、鄕土の、內外に存する、一切の人的及び物的存在を、いやしくも子供の目に見、耳に觸れるかぎり、すべてを環境と呼びなすやうである。果して、さうであらうか。私達の見るところでは、それらは、子供にとつて、環境的事物であつて、未だ眞の環境ではない。子供の眞の環境とは、子供の魂の琴線にふれ、子供の關心を呼び起し、子供に

何等かの心的活動を促すものでなければならぬ。子供と外圍――それは人であれ、また物であれ――とが、同じリズムに振動し、ハルモニーを奏でつゝ、何等かの共鳴共感を釀しなすに至つて、そこに始めて、子供の環境は成る。かく考へて、大人には大人の環境があるやうに、子供には子供の環境があると斷じなければならぬ。「子供は大人とは異なつた世界に住む」といはれるのは、この意味に轉釋し得ないであらうか。子供を圍むすべての事物が、子供の環境であるのではなく、子供の世界に屬するものゝみが、子供にとつて環境なのである。シェーラーは、「同じ森も、森の番人と、獵師と、散歩する人とに對して、それ〴〵別の環境(Milieu)なのである。それは、各人の有するミリウの構造に依存してゐるからである」と說いてゐる。して見ると、子供のミリウに入り得ないものは、よしどんなに高價なものであつても、いはゆる「猫に小判」であつて、決して子供への恩物とはならない。現代の玩具や恩物は、どれだけ子供のミリウへの洞察に根據づけられてゐるであらうか。

(四)

更に掘下げて考へるに、子供の環境といふものは、子供の關心を呼び起す環境的事物そのものといはんより、むしろ、かやうな環境的事物と、子供の生ひ立つ精神とが響應して、そこに釀し出される、ある「精神的な場」と解すべきである。子供と、外圍との、絕えざる精神的交涉こそ、子供にとつて、眞實のミリウなのである。そして、かやうな精神的交涉を可能ならしめるやうな、環境的事物をば、ミリウ的構造を有するものと呼び、これと子供との精神的交涉によつて、ある精神的な場を成立たせてゐるとき、これを子供の眞の環境と名づくべきである。

さて、ミリウ的構造を有する環境的事物のうち、最も著しいものは、いふまでもなく人である。家庭に於ける父母や、その他の家族、幼稚園に於ける保姆と、他の園兒など、中にも著しいものである。人以外の、外圍の事物は、教育的には、

人を介して、第二次的に、子供のミリウに入り來ると解せられる。そして、外圍の事物を、正しく子供のミリウに導き入れること、こゝに保育の、一つの大きな任務がある。こゝには、人的ミリウを第一次的に見て、探究をいそぐことゝする。

すでに、子供の眞の環境が、周圍との渾一的な響應にあるとしたら、環境の成立つためには、どうしても、子供と周圍とが、ある共通な場に住み込み、その場において、自他の意識をすてゝ合體することが、その前提條件とならなければなるまい。これを幼稚園についていへば、保姆と子供、子供と子供とが、ある精神的な場を共通にすることによつて、價値的な一體の意識に結ばれ、そこに子供の眞の環境が成立ち、この環境に自由に住み込むことによつて、子供の精神は、自然に、且つ徐々に伸び、一言に、「育て」が行はれるのである。一般に、「感化」といふのは、教師と子供とが、ともゞに、ある共通な、精神的な場に住み込み、そして、その場に呼吸する間に、自然に、ひそやかに、成立つものではあるまいか。もとより、そこには、子供の世界を越えた、ある價値的空氣の生起を見逃してはならないが、しかも、子供と共に住み、子供と共通な場に呼吸するといふことは、すべての育ての前提條件をなすのである。

(五)

して見ると、育ての任務は、「環境の整理」といふ、在來の表現で現はしうるにしても、その環境整理の努力は、子供に與へる環境的事物の選擇といはんより、むしろ、子供を圍む精神的空氣の醇化に注がるべく、從つて、保育者その人の性格と聰明とが、育ての究極の保障と見らるべきであらう。

そして、子供に與へられる環境的事物も、それが眞に子供の環境に入るためには、どうしても保育者の補助を俟たねばならぬ。事物はあくまでも事物であつて、事物に生命を與へ、その生命によつて、子供との心的交通を活潑に生起せしめるものは、保育者の聰明な補導の外にはないからである。「方法よりも人格」といふ教育上の箴言は、こゝでもまた、眞實

の響を傳へる。

かやうに考へてゆくと、私達は何よりも先づ、子供の世界に住み込み、子と共通な、精神的な場に呼吸し得るやうに、努めることが大切である。絶えず子供の世界を求め、子供のミリウをいつくしみ、我を忘れて、子供と共に喜び、子供と共に悲しめる童心を、いつ〳〵までも失つてはならない。ペスタロッチが、「少しばかり子供であることは誠によいことである。」といつた趣意も、恐らくこゝにあつたと思はれる。もとより、それは、「子供ぽい」とか、未熟とかいふ意味の子供らしさではなく、若やいで、無邪氣で、把はれないで、そして、眞正直で、眞剣で、といふ意味の子供らしさが、とくに保育者に必須の資質として要求せられる。若々しい精神のみが、若々しい子供と、同じ場をなし得るからである。

（昭和十三年二月）

子供黨列傳（五）

百濟人味摩之

石井庄司

日本書紀の推古天皇二十年の條に、百濟人味摩之（みまし）といふ者が歸化してきて、自分は嘗つて吳國に渡つて、伎樂儛（くれのうたまひ）を學び得たといふので、大和國の櫻井に安置（はべ）らして、少年（わらはべ）を集めて、伎樂儛を習はしめたとある。味摩之のことは、我が國の音樂史上重要な人物で、小中村清矩博士の「歌舞音樂略史」（明治二十年刊）の中にも、「外邦より歌舞音樂を傳へし事」といふ中で、取扱つて居られる。味摩之の前には、欽明天皇の御代に吳國の智聰といふ人が、書籍佛像と共に伎樂の調度一具を齎らしたことはあるが、智聰が實技をも齎らしたかどうかは不明であるから、味摩之こそは名實共に伎樂の將來者といふべきであらう。

いまこゝでは、そのやうな音樂史上の味摩之を語るのではなく、子供黨としての味摩之を考へてみたい。卽ち少年を集めて音樂教育をしたといふことである。さういふ技術を習得するためとはいへ、少年を集めた味摩之を一個の子供黨と考へたいのである。

それに就いて思ひ起されるは今日東京帝室博物館に保管せられてゐる御物の「聖德太子繪傳」と稱せられるものの中に、この味摩之の圖があるのである。この太子繪傳は、もと法隆寺東院の繪殿の壁に貼られてあつたものであるが、天明八年の頃に、その破損の甚だしいのを心配して、之を剝ぎとつて、五隻の屏風に改裝したもので、明治になつて、法隆寺から

帝室に獻納されたものである。その第二隻に味摩之の童子に舞を敎ふの繪がある。

勾欄のある御殿の緣側前の庭上でのやうである。帽子を被つた老人が、右手の袖を擧げ、左手を下にかくして、稍〻傾きざまに腰をひねつて、舞のポーズをしてゐる。その背後に、耳鬘の長い童子が、同じく右手の袖をあげ、左手を下うしろに下げて、老人にならふやうな腰付で、しつかと足を踏み、舞を舞つてゐる。その背後にまた同樣の童子がゐる。顏は極くあどけないが、年のほどは十二、三歲ででもあらうか。圖の前面には、殆ど全く同樣の服裝であり、同じやうなポーズをとつた二人の童子があつて、やはり舞を舞つてゐる。その右の方は剝落があつて、明かでないが樂器が置いてあつて、笛を吹いてゐるらしい童子が三人坐り込んでゐる、これら八人の人物が大體圓形をなしてゐる。なほ左方にも人物らしいのが見えるが、不明である。とにかくこの圖をみると、音樂の敎育者としての味摩之よりも、少年に取圍まれて、何の屈托もなく、愉快に舞を舞ふ姿こそは、正に子供黨といふべきである。百濟人味摩之を此の列傳の一人とする所以である。

なほかやうな音樂に關することといへば、時代はずつと後世になるが、應永申樂の世阿彌のものの中に、子供に關することがあるので一言觸れておきたい。例の「花傳書」の第一にある「年來稽古條々」である。

「此藝において、大方七歲を以て初とす」

とある。能の稽古の順序を示したものである。

「この比の能の稽古、かならずその物自然としいだす事に得たる風體あるべし」

といふのは、子供を理解することと深き至言といふことが出來よう。なほ同じ項の中に

「…ふとしいださんかゝりをうちまかせて、心のまゝにせさすべし。さのみによきあしきさは、をしふべからず。」

といふのは、最もよく子供を見拔いたものであり、今日なほそのまゝ敎訓として熟讀すべき文字である。

恐らく世阿彌は、少年の敎育に對して、嚴格な態度を持つてゐたやうに思ふ。しかし又一面には、子供の心理をよく把握した、よき指導者でもあつたやうに思ふ。要するに、子供黨としての資格を備へてゐたやうに思はれる。（完）

一年保育について

東京大和郷幼稚園　坂内ミツ

幼稚園教育は二年が至當であるといふ事は其道の人には知られて居るが、社會の實際を見るに、一年保育を希望して居る人が多數ある事は事實で、大抵の幼稚園は一年保育を餘儀なくさせられて居る。甚だしい所になると二百名近くの幼兒が全部一年保育を受ける所もある。中には一年も長いとて小學校入學の數ヶ月前になつて入園させる人もある。元より是等の人の考へ方は小學校入學の準備といふ簡單な考だけで、幼稚園の眞價や目的を知らない爲めで、入園させて其實際を知ると、もつと早くからお願ひすればよかつたと後悔する人が多いのである。

一年保育の子供は年齢が多いだけに、先生や園になじむ事も早く、理解力も進んで居るので取扱はやさしいのであるが、何といつても全く知らない建物の内で全く知らない先生に手をとられ、全く知らないお友達と遊ぶのであるから、其幼稚園に融合して先生の手にはいつてしまう迄には相當の時を要するのである。さうして居る内に長い夏休みになる。九月と思つて居る内に忽ち一年は過ぎてしまう、忙はし過ぎて子供の心身に及ぼす效果は少いのである。私の園の經驗は誠に淺く且つ雜薄な觀察に過ぎないので特に書き立てる程のものではないが、幼稚園の必要とか、期間とかと論ぜられる今日、何かの參考にもなればと次の二三を擧げて御批評を乞ふ次第である。

一、身體の方面

年々感ずる所であるが、四月入園の當時一年保育の組に入學した子供と、既に一ヶ年保育した同年齢の子供とを比較して見るに、新入兒の方が身長の高い人が多く太つても居るやうに見えるので、これは大變、一ヶ年保育したのに身體の發育が悪いのではないかと心配になる。所が四月末

身體檢査をして見て再び驚くのである。卽ち身長は高い人もあるが、體重は輕い人が多い。頭が大きくて痩せて居る人が多い。殊に筋肉のしまり方に於ては遙かに違ふ、二年目の子供は小粒に見えても筋肉に張りがありピチ〳〵して見るからに氣持ちがよい。入り交つて診察を受けても、この方は二年目の方でせうと園醫が申される程で、素人が見てもわかる位である。試に四、五年間の統計をとつて見たのに、高いと見えた身長も體重も胸圍も全部二年目の子供の方が多かつたので我が事を得たりと喜んだ事であつた。

又脊柱の彎曲して居る子供がたまにあるが、多くは一年保育の子供で二年保育の子供には殆んど其例がない。數年前には左彎、右彎の人が多くて驚いた。其原因を考へて見るに、二年保育を受ける人が入園するのはまだ小さいので、それ以前に字をかくとか繪を畫くとかいふ事は極めて少いので姿勢を惡くする事がない。幼稚園でも注意して姿勢をよくさせるので彎曲する事がないのである。處がもう來年は學校といふ頃になれば、子供ながらに探究心が起り、兄や姉のある人は殊に字を書いて見たくなり、繪も畫く事になる。從つて机による事が多いのであるが、大人が注意しないと姿勢を正しくしないで書く爲めに、脊柱に狂が來るのかと思はれる。單に前後左右に彎曲しただけなら大した障碍もないかも知れぬが、脊椎個々の連絡の上に異常を來す事があるとすると、身體全體の上に、又引いては性格の上にも影響する事があるので等閑にされない問題である。脊柱を正しく保つ事が生活全體の上に大に關係のある事を主張されるやうになつたが、まだ〳〵研究せねばならぬ事であると思ふ。

尙ほ一年保育の子供は幼稚園に馴れないといふ點もあるが概して活動量が少い。顏色も惡く活氣に乏しいやうに思はれる。

一、心意の方面について

性格の强過ぎる子供と、弱過ぎる子供とまじつて居て中庸を得て居る人が少い。

感情の統制がされて居ない子供が多い。

悧口に見えるが、常識的で理論的のものゝ理解があるわけではない。

概念がはいり過ぎて觀察力が鈍い。

繪を畫いても立派な繪を書く人が却て一年保育の方に多いが、其繪も自分の內部から出たものでなく、外から入れられた概念で畫くのが多いので、形や色などもよく出來て居るが、何回も何回も畫く內には眞の力が現はれて來る、自分から觀察してそれを表現するといふ事がむづかしい。

文字とか數觀念とか直接目に見えるものに興味を持つて居るが、自然を樂しむとか自然を觀察するとか、考へて見るとかといふ、結果の直接あらはれなくて、しかも人として大切な所がぬけて居る。

以上は大人の指導の仕方が悪い爲めにさうなるので、直接目に見える所ばかりを見て判斷する爲めで狹い見方をするから來る結果である。例へば熱心な母親が、「幼稚園に通つてから急に悪くなりました。お行儀は悪くなるしいたづらばかり致します」といはれた事がある。其子供に對して私の觀た處では、入園當時よりも子供らしくなり活動量が大きくなつたので喜んで居たのであつた。母親の理想が子供本位でなく、大人から割出した理想であつた事がわかつた。かうした幼兒の積極的な活動を抑へつけて置くから、幼稚園に來て其壓迫がなくなると反撥力のある子供は急に行動が活潑になり、活動が過ぎてはしやぎ出すのである。又彈力の弱い子供は長い間消極的にさせられたので、幼稚園に來ても自發的な活動が出來ず、何事にも興味が持てなくなる。滿四、五歲になると急に活動量が大きくなるので僅か一ヶ年でも性格の上に及ぼす事が非常に大きいのである。

一、其他の點について

全部といふわけではないが概して二年保育を志願する親は非常に熱心である。家に置いても大して手足まとゐにならず一人遊びをする子供を幼稚園に通はすと、送り迎への人が必要である。子供だけ出すならよいが大人が時間迄に支度をするのは可なり骨が折れる。費用の點からいつても大變な違である。熱心な親でなければ出來ない筈である。其爲か保護者會とか講演會とかいふ場合の出席は何時も二年保育の人が多い。

一年保育を希望する親の內には神經質で子供の事を考へ過ぎる人が多い。寒くなつたから着物を着せてくれ、暑く

なつたからぬがせてくれ、ブランコには乘せないでくれ、砂場にはいつては汚くなる、と一々干渉する人が多い。

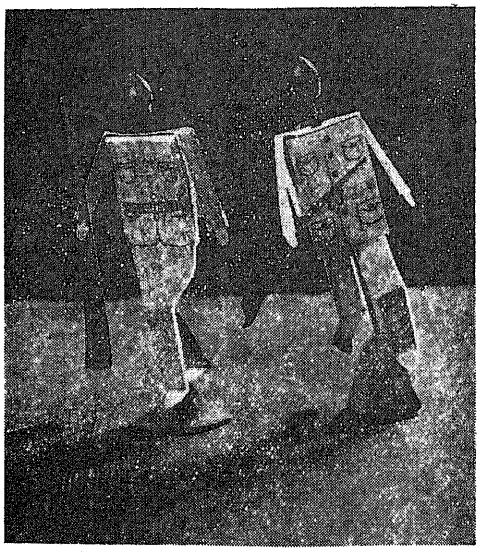
以上考へて見れば、どうしても幼稚園には二ヶ年は通はして貰ひ度い。お休みをしないでは何の效もないのである。生れてからこの方植ゑつけられた色々の僻のある子供を、一年や二年の間に矯正されるものでない事は明かである。幼稚園に入れたのに效果がないと氣を揉む親は元より、先生の方でも效果の見えない事を氣にしてヤキ〳〵する必要はない。教育は一生である。先生が誠意をもつて接して居れば一生の内どこかに現はれて來る事は疑ないのである。

これはあまり卑近な例であり、且つ日頃の主張と相反する所であるが、小學校への入學の成績を見るに、二年保育の聲が一年保育より遙かに成績が良い。毎年そうである。特に本年は二年半在園した女兒が三人あつた。何れも一月以後の生れにて身體の發達もおくれ、智能の點も如何と心配して居たのに、結局は三人とも受驗して第一希望の小學校に入學する事が出來た。これは全く子と親と先生と三つの熟誠が一つになつた賜であると思ふ。この嬉しさに意を強うした私は、實際のまゝを御紹介して御批評を仰がうとする次第である。

フレーベル賞入選手技

三等

兵隊さん



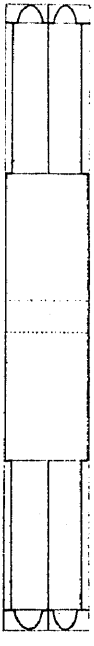
京都市今宮幼稚園　堀田景子

私の園は洛北今宮神社の廣い神苑の内にありますので自然の恩物に惠まれて居ます。此頃は樫の實や落葉を拾ふに

線は切取線　點線は折曲る

はいのう

手



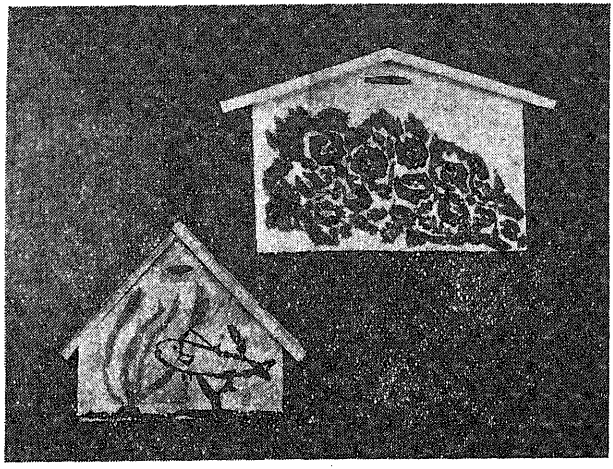
胴體

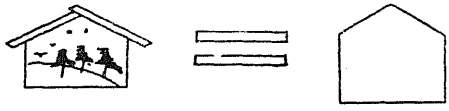
專念してゐます。ふと其の實から思ひ付いて鐵兜の兵隊さんを作つて見ました。

若し樫の實のない場合は黍稈で頭を作つても面白いかと存じます。

三　等

繪馬





東京市東洋幼稚園保姆　藤井君代

製作説明

木工を取り入れた繪馬風のかべかけ

材料並準備

廢物の板を利用して適宜(用ふる板の大小により任意の大きさとす)の大きさに圖の如き形の臺板と、細い屋根板二枚を整へおく、外に、

釘　四本(細く短いもの)金鎚

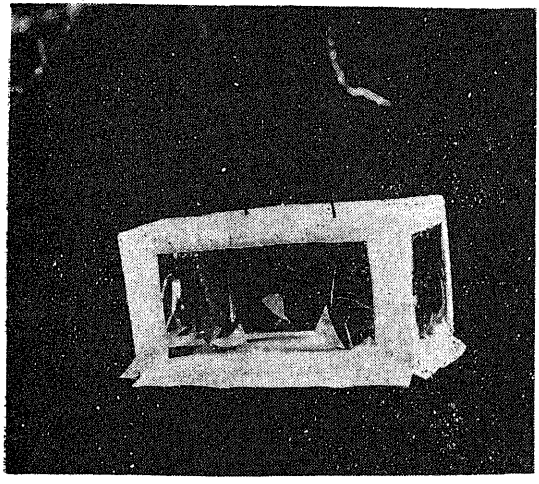
細いリボンかリリアン一五糎位用意す。先づ釘と金鎚とを與へ各側に二本づゝ釘を打ち屋根をつくる。

圖の如き形に出來上りしものを臺の表面と屋根に白いゑの具を塗ちす、よくかわかして、上部に二つ穴を

開けてやる。それにリボンを通し結ぶ。出來上りしものに、魚の具にて、自由畫を畫かしむ。

三等

金魚鉢



高知縣赤岡町清濤幼稚園　司馬重子

材料

色厚紙　長サ三〇糎、巾二五糎　一枚
　　長サ一五糎、巾七糎　一枚

色紙　赤　六糎正方形　一枚
　　七・五糎正方形　一枚

〃　黑　七・五糎正方形　一枚

パラピン紙　長サ一三糎巾七糎　二枚
　　長サ九糎巾七糎　二枚

其他、毛絲、白絲、糊

佳作一

大鋸屑繪

三重縣上野町立第一幼稚園　西口志佳

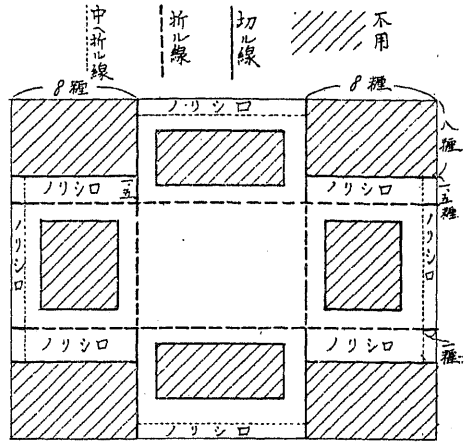
大鋸屑繪の出來上る迄

或日　園兒が、よく乾いた白い砂を、細かく篩つて、お砂糖屋さんごつこを、はじめました。

「をばさん　お砂糖買ひに來て下さい」

「マア、きれいなお砂糖ですこと、一袋おいくら」

「拾錢」



作り方

1、金魚を摺込み適宜絲をつける
2、圖の如く畫用紙を切りはなす
3、畫用紙に糊をつけセロハンを貼りつける
4、金魚を適當につるす
5、底を貼りつけ、角を切り取る
6、毛絲にて手をつける

「次は、お馬」「ハイお馬カッポ〳〵」

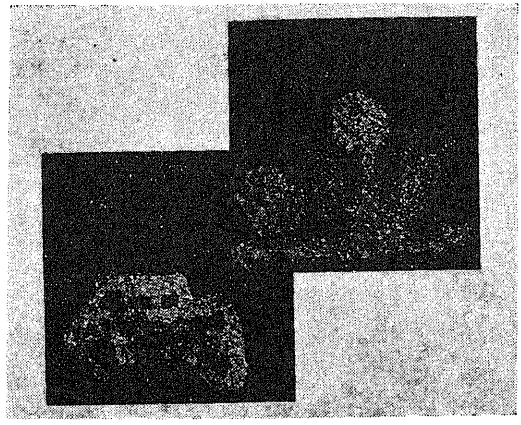
「その次は、自動車」と、あちから、あちから注文殺到、そのうちに

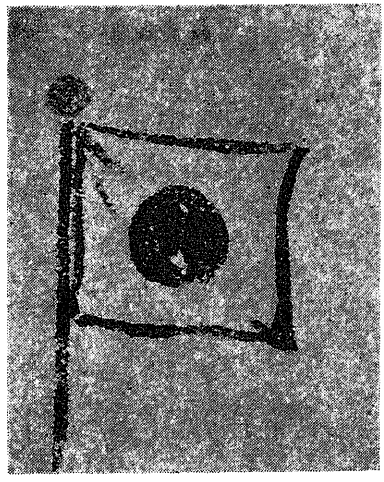
「僕も畫かう」

「わたしも」

といつた樣子で、それぞれ得意の彩管ならぬ砂を撒布しだして、はからずも、園庭の一隅に、時ならぬ、砂繪の展覽會が、開催されまして、皆が大喜びをいたしました。

でも、それは、ぢきに消されて跡形もなくなつてしまひます。消しては畫き、畫いては消す、其束の間が、樂しいのですけれど、中には消すのが惜しい樣な傑作もあつて、「何とかものにしたい」と考へてゐましたが、何も得思ひつかず、たゞ、「砂繪遊び」として徒らに「畫いては消してしま





「ではこゝへ、置きますよ」

と言つた調子で、白い砂のお砂糖を、澤山買ひました。其白い砂を右手に握つて、サラサラ、ちこぼしながら　地上に □だの、▽だのを畫きましたら、園兒達は大喜びで

「先生、こんぢは飛行機畫いて」、「ハイ〳〵」

ふ」といふ事をのみ繰り返してゐました。

處が、近頃當地方の其處此處に、製材所が、三つ四つ出來ました。從つて、大鋸屑を積んだ荷車が通るのを、よく見かける樣に成りました、其運ばれてゆく大鋸屑を見て、フト聯想したのは「砂繪」の事で御座います。

早速籠に一杯の、大鋸屑をもらつて來て、七夕樣に色紙を染めた殘りの染料で染めわけて、自分で試み園兒にもさせてみました處が誠に大喜びで「先生もう一枚」「僕ももう一枚させて」と、大層な人氣でございます。

こんな下らない「思ひつき」に對して御批評を仰ぐなどしは、實におはづかしく、烏滸がましい樣に存じますが、當地方としては、この

○材料が非常に得易く、しかも極めて安價である事

○砂繪の樣に單色でない事

○紙上に結果が殘る事

殊に畫いた直後は、うすくて朦朧として居るが、大鋸屑を撒布すると、パッと鮮明に繪が浮び出すことが、幼兒を非常に悦ばせる事、なほ又自分で考へついた事が嬉しいといつた點で、兎に角提出させて頂きます、どうか、御笑評下さいませ。

材　料

A大鋸屑

1、よく乾して篩つておく(なるべく細かく)

2、染料を少量の水で溶き、更に水を加へてよく攪拌し、琺瑯引器(洗面器か鍋)に入れて火に掛ける、さうして沸騰したら先きに篩つて置いた大鋸屑を入れて、搔き交ぜる。

3、新聞紙か何かの上に、擴げてよく乾かす

4、染めない生地の儘のものも使用が出來ます、又大鋸屑には白いのと少し赤味を帶びたものとの二種類ありますが、なるべく白いのを選んだ方が染め上りが鮮かです。

B糊

1、生麩又は姫糊を湯又は水で溶き薄めてドロ〳〵の液狀化して置く

2、少し薄い色をつけておく(白紙に畫いた場合、畫いた

線のわかる樣に）

C筆　繪具筆又は使ひ古しの毛筆

畫き方

畫紙或は其他の用紙に

1、糊（うすめておいた）を毛筆につけて、任意のものを畫く

2、其糊の乾かないうちに、大鋸屑を撒布する

3、用紙をたてゝ、靜かに大鋸屑を、拂ひおこすと、任意の繪畫が、現はれます。

費用

最後に費用を記しませう。

極めて安價廢物利用

A大鋸屑代價＝金拾錢で約六斗

B直接染料＝拾錢で五六升の大鋸屑を染める事が出來ます。

以上いづれも、當地方に於ける時價で御座います。

母達の話題

常石貞子

いつも、坊ちやんのお迎ひにおいでになる、N夫人のお美しい姿が、一週間程みえないと思つたら、今日久し振りでお目にかゝつた。

「ごう遊ばしたの」。「えゝ。一寸、兵隊さんのお宿をしたものですから、忙しくて、つひ學校の方をなまけて」とお笑ひになつた。「それは、本當に、大變でしたね。私も、二三日前、青山南町の、叔母の家に行きましたら、やはり將校方十人、宿泊して居られましたわ。居合せた私は、配膳をする女中等に手傳つて、これから御出征なさる方々が、今後疊の上で食事をせられる日が幾日あるだらうと、思つて出來るだけ、鄭重におもてなしを致しましたの。」「御苦勞樣でしたね」とN雄さんのお母樣がおつしやつた。「さういへば私、東京驛で、日本赤十字東京支部の、臨時特別救護班の蔭山班長以下看護婦さん達三十名程出發なされたのを遇然おみをくりしましたわ」とW夫人がおつしやいましたらE夫人が、言葉をついで「私の近所の、警部の方の奥さんで、四人の子供を御主人にあづけて出られたのですよ。一番下の、三つの坊ちやんが、ごうしてもお母樣のそばをはなれないので驛まで御主人がつれていらつしやいましが、いざ發車といふ時、其の坊ちやんが泣かれたので、お父樣が、叱つて居られましたがなんともいへない氣持でした。」と、しんみりおつしやつた。「でも、三つならまだよいのよ。產れて、間もない赤さんを殘して應召せらるゝ方もあるのですつて。お乳がはつて、發熱するのを、注射したり氷でひやしたりして出かけられるのですね」「もう少し陸軍省が氣を氣かして、志のある人で、責任のない者を、

之に當て、母の位置にある人は、出來るだけ最後まで、母の義務を、果す樣にしたらよいでせうにね」とN雄さんのお母樣がおつしやると、皆のお母樣方の口から「本當にね」といふ言葉が發せられた、異口同音に。それから、數日たつた、或る秋雨のふる土曜日でした。我兒を先生にお願ひしてから、暫時千人針を、皆樣にお願ひしたくて、玄關にたつてゐました。一針つゞの眞心をいたゞいて、最後に椅子に腰かけられて、お子樣のおかへりを待つ、奥樣にも、一針お願ひいたしました。「ごなたが」「はい。私のいとこが、麻布三聯隊から、長島部隊に屬してこの四五日中には、出征しますので」と答へた私は、一針で、すむつもりでしたら幾つも、幾つもして下さるので、さては寅年でいらつしやつたか、やれ、やれ、お手間ごらせをして相すまないと、思ひながらも、澤山やつて、いたゞけるのを喜びながら、布の端をひつぱつてゐました。かげ紋のある、お召の着物からうづら縮緬地に、爆彈の刺繍をした半襟を、品よくのぞかした奥樣は、きようにに、手を運ばせながら、色々のお話をなさる。

獸肉の儉約から兎料理は如何等と、話をしてゐた私共は、急に冬が來た樣に、冷氣が身にしみる袷の袖の、寒さに、思はず、襟をかき合せ、北支上海の傷病者はどんなに、身にこたへるでせうと、いつの間にか、從軍看護婦の方々の事が、話題になりました。私は數日前の、皆樣のお話を思ひ出して、「現役の看護婦の方々に、まぢつて働く應召看護婦の方々の中には、赤さんを、他人にあづけて、戰地に向ふ方も、あるさうですが、志さへあれば他の者が代れるでせうに」と、私が、つぶやきますと、奥樣は、强く否定なさつて、「それは、こてもだめでせう、赤十字の看護婦の方々の活動は、なまやさしいものではありません。それに、團體訓練や赤十字精神教育が、一朝一夕で、出來るものではありませんから。宅では、あの子が八ッ月兒で生れた時、これでも、育つかと、醫者も疑問を持つ位でした。ガラス箱の中に入れて育てたのですが、その時たのんだ看護婦さんは、赤十字出の方で實に立派な方でした。きびんな處置をなさる高潔な人格を、持つて居られました。

時々呼吸困難に、おち入る嬰兒を、細かい注意を拂ひ、

適當の溫度を調節して、霜ふる寒夜も、鐵をもとかす炎熱の晝も、統制された處置の許に、約一年間、よくも、つゞいたものだと、誰一人感じないものはありませんでした。人並に發育してから、私共の手に渡されたのですが、その方の後を、私や、女中等、三人がゝりで、なほ充分な事が出來かねましたもの。

私は、今でも、その方の幸福を、合掌して毎日、祈つて居ります」と仰せられる奥樣の頰には、涙がつたはつて居りました。何といふ感激にみちたお話でせう。私は、この奥樣の、姓も、名も、知らない。坊ちやんも知らない。けれども、何といふ幸福なお子樣であらう。よし、この坊ちやまが、他の兒に比して或は、幼年期は、發育がおくれても、かゝる周到な注意の元に育てられたら、どんな立派な體格を、かち得られる事であらう。私は頭をたれた。瞑目した。私の頭の中は、白衣の天使の樣々な活動が考へられた。戰地勤務の中で、重要な傷病兵を、病院船に、乘船させる看護婦等の一絲亂れぬ作業を。船酔のために、顏色蒼白となる事もあらうに、我が身をかへりみず、嘔吐に惱まされながら、洗面器を片手に持ち、檢溫して、歩く姿を。銃こそ、負はね、軍刀こそ、帶びね、その兩肩には、銃よりも、背嚢よりも、重い責任を擔ひ、傷き倒れた勇士達を、母とも、姉ともなりて手篤くみとる白衣の天使よ。おんみは平時は、その犧牲的な赤十字精神もて、如何に多くの人々を救つて居られる事だらう。大和撫子。日本のほこり。

急にあたりがざわついたと、氣がつき目を開けば今しも、保育の時終へて、にこやかな笑をたゝへた先生方が各家庭の母の手に幼兒を引渡さうとせられてゐた。

子どもの體について

附屬幼稚園衞生室

今年はいつの年よりも春が待たれた樣に思はれるがその春三月が早くも來てしまつた。もう新しい子どもを幼稚園に迎へる準備をしなければならない。非常時局に當り、子どもの健康について色々論議されてゐる折から、當園の身體檢査の結果の身長、體重、胸圍、坐高を統計的にしらべてみた。當園のみの統計であるし、人數が少く、一般の標準といふ樣なものには勿論なり難いが何かの參考にもなれば幸である。

第一表は單に身長、體重、胸圍、坐高の相加平均を出してみた。この表でわかることは、男兒と女兒を比較してみて、年少組に於いては身長、體重、胸圍、坐高の四つとも男兒が大きいが、年長組になると胸圍を除いた他の三つは女兒が大きいことである。この年齡位から女兒の方が早く成長するといふことがこゝにも現れてきてゐると思はれる。

第一表

		男兒		女兒	
		滿五歲年長組	滿四歲年少組	滿五歲年長組	滿四歲年少組
身長	平均	106糎85	100糎72	107糎05	100糎43
	人數	34	52	23	36
體重	平均	16瓩66	15瓩31	16瓩85	14瓩82
	人數	34	52	23	36
胸圍	平均	55糎15	53糎64	54糎36	52糎12
	人數	34	52	23	36
座高	平均	58糎93	58糎69	61糎50	58糎51
	人數	33	51	22	34

そこでこの表は四月末の身體檢査の折のものであるが、二月半の入園檢定の折の結果と比較してみる。

次にその表を掲げてみる。

この表をみると男兒、女兒共に身長、胸圍の差がプラスである。ここに女兒に於いてその價が大きいのにたゞ體重のみ男女兒共マイナスである。即ち四月になつて減つてゐる。この表に現

れた結果からのみ考へると、春は長さの方に伸びる時期であるからかも知れない、が他の種々な原因をしらべて研究しなければ早くそうと決められはしないが注意されることである。

次に第一表は前にも言つた樣に相加平均であつて、ほぼ大抵の統計はこれを用ひる樣であるが大きいもの、小さいものゝ程度を知る爲、次に表にしてみる。

第三表の平均と第一表の平均を比較してみるとその差は、年少組男兒の身長の他は大體に於いて一致してゐる。即ち相加平均に近い大きさのこどもが多いわけである。

第二表

		男兒	女兒
身長	二月中旬	糎 99.81	糎 98.86
	四月下旬	100.72	100.43
	差	+0.91	+1.57
體重	二月中旬	瓩 15.59	瓩 14.97
	四月下旬	15.31	14.82
	差	−0.28	−0.15
胸圍	二月中旬	糎 52.68	糎 51.39
	四月下旬	58.96	58.51
	差	+6.01	+7.12

第三表

		男兒		女兒	
		滿五歲長組年	滿四歲少組年	滿五歲長組年	滿四歲少組年
身長	最大	115.0糎	110.7糎	115.8糎	106.6糎
	最小	101.0	91.3	101.3	92.9
	平均	108.0	106.0	108.55	99.75
體重	最大	19.8瓩	19.0瓩	19.8瓩	18.0瓩
	最小	13.5	12.0	14.9	12.0
	平均	16·65	15.5	17.35	15.0
胸圍	最大	59.1糎	58.0糎	59.0糎	56.5糎
	最小	50.5	49.5	49.5	48.5
	平均	54.8	53.75	54.25	52.5
坐高	最大	66.8	64.3	66.2	61.9
	最小	55.7	54.0	58.4	53.8
	平均	61.25	59.15	62.3	57.85

これらの表は單に身體の言はば外觀上のことでこれをもつてたゞちに健康の如何を決めるわけにはゆかないけれど子どもにあつては體重、胸圍などが健康の一つの目安にはなるわけであらうし、殊にその增加の割合はよく注意しなければならない事であらう。國民體位の向上がしきりに叫ばれてゐる。第二の國民の身體については今迄より一そう注意しなければならないと思ふ。

幼兒教育の文化性（五）

——講習筆記——

倉橋惣三

目次

第一　序論
第二　道德教育
第三　宗教教育
第四　藝術教育

第四、藝術教育

（一）序の言葉

今までの私のお話の大體の方針が、幼稚園の教育を、人類の持つて居ります高い文化ニ云ふ立場から眺めまして、即ち

教育學的の言葉を用ひますれば、文化教育的に幼稚園を眺める。このお話でありました。

そこで先づ道德と云ふ大きな文化の問題を考へ、宗教と云ふ文化の問題を考へまして、今度は藝術と云ふ文化を考へて見度いと思ふのであります。道德教育とか宗教教育とか藝術教育とか云ふ事が、その完全なる一杯の意味に於て幼稚園にあるものではありませぬ。幼稚園に於ては、心身を健全に發達せしめ、善良なる性情を涵養し、と云ふ事が目的でありまして、それ以上にまで持つて行くものでない。又此方は教育者として文化を以て目的を立てゝ居りますから、その意味で世に謂ふ所の道德教育、宗教教育、藝術教育が、幼稚園のこころでごう結びついて來るかと云ふ事をまあ考へる譯になるのであります。

(二)藝術教育と他の文化教育との比較

そこで、今迄の問題と、この藝術教育と云ふ言葉とを較べて見ます時に、先づ玆に明かなる一つの相違があるのであります。道德と云ふ事は、人間生活に於きまして非常に高級なる發達を遂げて居るものであります。そこに極めて——何と申しませうか——色々な人間の普通の生活が極めて淨化されまして、又一面には人間の生活が社會的に最もよく秩序立てられまして、こゝに道德と云ふものが出て來るのであります。私は道德教育のこころで、二つの事を申したと記憶して居る。一つは眞情の生活を教育すると云ふ事と、一つは現實の生活訓練をすると云ふ事と二つ申しました。所でその眞情に卽して行くと云ふのは、幼兒期道德教育の根本の問題でありますが、眞情卽道德ではありませぬ。人間の誠とか眞心とか云ふ形で出て來ますものゝ中には、實に淨化しない、訓練せられない複雜なるものがあるのでありまして、それ等を段々宗教に淨化された後で、立派な美はしき道德が殘るのであります。又、現實と云ふ中で、無理をしたり無茶をしたりする事の出來ない、現實の中で色々な生活が起るのでありますが、この現實の中で起ります所の實際は、時には非常な實際主義的、

必要主義的、なものがある譯であります。それが、現實と云ふそのことに於て、充分に秩序立てられました時に道德になるのでありまして、言ひ換へますれば、道德と云ふ事は、生活の相當な文化的陶冶の後で出來て來ますものであります。

この意味から――これを逆に申しますと、私は何時でもさう云ふ事を申して居ると自分で思つて居りますが――幼兒生活には、まだ道德と云ふものがあるかないかゞ問題であります。幼兒生活は、非道德的ぢやない、反道德的でもないでせうが、西洋人の所謂ノンモラールでありまして、無道德と言ふと亂暴ですが、道德と云ふ樣な大人の世界に於て現される樣な、高い洗練と秩序とを經て居ります樣な意味に於て道德と云ふものが幼兒には要求されませぬし、又、ないものであると言へると思ふのであります。

宗教と云ふ樣な事も、先程も繰返し申しました如く、感謝性、信賴性、神祕性が養はれて居りますれば、宗教教育に向つて立體的に意義があると云ふ事を申しましたけれども、幼兒期そのものに直ぐ宗教性があるとも言へないのであります。宗教性とは、人間生活の非常に程度の高い高級なる所の宗教と云ふのでありまして、そんな、野蠻人がやつて居ります樣な原始的なものは宗教學の方では宗教と申しませぬ。我々の宗教は餘りにも小さいのでありまして、宗教の本質としても大變小さいのでありまして、宗教は非常に高級なところにのみあるものと斯う考へる。即ち幼兒期には、綿密なる意味の道德性も宗教性もまだないのが當り前であります。だから文化として高いあの道德教育へ、宗教教育へ、どうしたら用意する事が出來るだらうかと云ふ問題にお話をした譯であります。

これと較べまして、藝術と云ふ事であります。これは少し趣きが違ふと思ふのであります。そこをハッキリ解釋して置く必要があると思ふのでありますが、藝術と云ふ事も勿論人類文化の最高峰でありまして、人類文化のこの高さに於て始めて出來て居るものであります。例へば吾々が巨勢金岡の繪を見ました時に、實に人間と云ふものはこれ程迄に高くなる

ものかと思ひます。或はベートーヴェンの音樂を聽きました時に、人間文化と云ふものがどこ迄高い所に上り得るものかと云ふ事を驚くのであります。然し乍らこの高い所に行つて居りますものは、勿論幼兒にはありませぬ。そんな高いものは幼兒には決してないのでありますが、然しその藝術の一番大事な問題卽ち美と云ふ事は、美と云ふものゝ一番主なる特質と言ひますか、……性質、これは幼兒の生活の中にあるのであります。

もう一度他の言葉で今申した事を言つて見度いと思ひます。道德と云ふ事は、斯うするあゝすると云ふ事でなく、その中心は善であります。グッドであります。善と云ふ事は非常にえらい事でありまして、幼兒の中には善なんと云ふものゝ本質的なものは私はないと思ひます。これがさつきの意味であります。幼兒に善がないと言ふと、皆さんはお怒りになるか知れませぬが、善がないと云ふ事を基礎にしてこそ、幼兒には惡もないと云ふ事を吾々は考へて居るのであります。幼兒には惡もありませぬ。善もありませぬ。善良なる性情とか云ふ性情そのものゝ形容詞としての善はあるかも知れませぬが、彼の道德の本質である善、そんな純粹な善と云つた樣なものは幼兒には求められませぬ。これは聖人君子にして始めて得られるものでありまして、殆どないと言つてもいゝのかも知れませぬ。宗教の根本はどう云ふ事を信ずるかと云ふ細かい話は別として、所謂聖であります。セイクレッドメスであります。感謝とか信賴とか神祕とか云ふものが、本當の人間精神になるのは聖であります。聖は、偉い名僧にはありませうし、今日人類文化の高いところにある皆樣にはあるでせうけれども、幼兒には聖は求められないと思ふのであります。感謝なんて云ふ事も、聖なる感謝、セイクレッドサンクスと云ふ事に行かなければならぬのであります。けれどもそんな事は幼兒に求められませぬ。ですから、感謝性も人間生活であると云ふ事を申したのであります。

(三)美とは

所で、その道德の中心――善はありませぬが、藝術の中心たる可き美的生活と云ふ事は、幼兒に一杯にあるのであります。巨勢金岡のあの繪を描く事は出來ませぬ、リストのあの細かいテクニックを作る事は出來ませぬ。けれども、美とは何ぞやと云ふ時に、それは幼兒の中にあるのであります。

美とは何であるか――これは非常に面倒な問題で御座いませう。美學者に問ひましたならば、問へば問ふ程分らなくなる程込み入つた理窟もあるでありませう。けれども、取出されたる美とは何ぞやと云ふ事は大變でせうが、美と云ふものが製されて居る時に……と云ふのは、美を造る時でも美を鑑賞して居る時でも、美と云ふものが生活の中に置かれて居ります時は、これは斯う云ふ特質を持つて居るのであります。卽ちそれ自身としての純粹性と云ふ事が大きな特質であります。美と云ふものを、如何なる意志に於てもそれが生み出す所の結果に於て、美にはならぬのであります。善は――グッドは、結果が相當重大なるものであります。宗教も亦さう云ふ意味の、神と疑念との關係に於て、結果と云ふものがあるかも知れませぬ。宗教では、一番奧深いところで、斯う言へるのではありますまいか。何故に人間が神樣を信ずるかと云ふ事は、神樣に此方も信じて頂く爲である、斯う言へるのであります。何方も信じて頂く爲であります。信じたつて信じなくたつて向ふは同じですけれども、此方が信ずる事に依て、信じて頂く爲であります。けれども又「祈らずとても神や守らむ」と云ふ意味で、信じてくれないものがあるかと考へるかも知れませぬが、信じると云ふ事は、信じられて居ると思ふより他ないのであります。その意味に於て、宗教と云ふものも――普通の人間の俗界の結果主義ではありませぬが――そこにさう云ふ結果が入つて居るのであります。

所が美的生活と云ふものは、全然結果が入つて居ないのであります。結果と云ふ事がそこに入つて來たならば、美ではなくなるのであります。これは詳しく申上げる迄もないと思ひます。結果の爲と云ふ事が少しでも混つて來たならば、ど

んなに色々の調和がうまく出來て居やうが、そんな事は美なるものぢやなくなつて來ます。

もう一つは、それと同じ事を心理的な他の言葉で言ふに過ぎないかも知れませぬが、美と云ふ生活經驗は、我と云ふものがなくなるのであります。道德に於ては、我と云ふものがなくなつて了つては道德でなくなりますけれども、充分淨化され、充分訓練されました後に、淨化されたる訓練されたる我と云ふものが殘つて居るのが道德でありまして、矢鱈に無我になつて了ふのが道德ぢやない。若し無我になるのが道德ならば、私は毎日寢て居ります。寢てさへ居れば惡い事をしませぬ。熟睡さへして居れば……けれども熟睡狀態は、起きて居る時にごうも惡い事をして居るからせめて寢て居る時だけ罪がないと云ふのですから、別に善ぢやありませぬ。寢善なんて云ふものはありませぬ。

宗教はこれと少し違ひまして、對象がありますから、對象の中に自分が吸込まれたりする。對象との關係に於て人間と人間がぶつかつて居る、道德と較べると違つた事になりますが、自分が感謝するのでなく、人格が中心になつて來るのではないかと云ふ事を申します。卽ちこゝに我があります。宗教の結果、吾々が、人間生活の中では無我の樣な狀態になるのでありませう。實に謙遜なる犧牲精神が出來るさうであります。けれどもそれは、宗教の結果、人間同志の世界がさうなつて來たので、それは宗教に基く道德のさう云ふ關係が出て來るでありませうけれども、然し乍ら宗教そのものゝ實質に於て、信じたらば不滿でなくなつて了つて、神樣の方ではお困りになると思ふ。誰かゞ信じて居るがなくなつて了つたと云ふのは、サブジエクトのない信仰と云ふものは、實にあやしいと思ふのであります。

所がこれに較べまして「美」と云ふ場合には我がないのであります。これは、心理的に見ましても、極く簡單に分る事であります。

「昨晩はまことにいゝ月で御座いました。實にいゝ月でよく霽れました」——本當に或時間雲がすつかり霽れまして、言

ふに言はれない美しい月である。けれどもその月の美しさと云ふものをヒョッと見る人は、その時に我がない人であります。月の美しさに我がなくなつて了ふから「美」になるのであります。詰りフッとあの中に行くのも、自我がなくなつて美になる。いゝ音樂を聽いて居る時に、實に我がなくなります。いゝ音樂どころでない。私の雄辯でさへも、皆さんの中には無我になる方がある。(笑聲)私は非常に喜んで居る。あの人が無我の狀態になつて居る、と云ふ時には、私の講演が美的になつて居る時である。併せてその人は寢善であると云ふ事になつて、道德と藝術が合致するのであります。その、我がなくなると云ふのが美の特質であります。詰り私は――よく知りませぬが――大藝術家が作品をする時には、インスピレーションが來る。私のところに一度も來た事がないから、どんなものか知りませぬが、インスピレーションが來る。それに依て我がどうかなるさうです。さうしてずつと脚出す。私だつてさう云ふものさへ來ればうまく書くが、生憎來ない。(笑聲)インスピレーションが來て筆をとるんですが、私だつたらインスピレーションが來ても、筆をとつたらインスピレーションがガッカりして了ふんでせう。飛んだ所に戸惑ひをして、インスピレーションとは腦溢血の別名であると云ふ事になつたら大變であります。所が藝術家の方はどう云ふものですかインスピレーションが來て書いて居ると無我になるさうです。私も時に、書いて居ると無我になつて、何を書いて居るか分らなくなりますが、實にそれでちやんと出來るさうであります。斯うして〳〵と云ふ理窟でもなし、うまく書かう〳〵と云ふ事は一つもないさうです。うまく書かうと云ふ氣がある中は書けないさうです。藝術にはならぬさうであります。――私は口で言ふだけです。何の事だか分らない。私は昨日、皆樣の中の方が彼處で遊戲をしていらつしやるのを見て、これも實に藝術だと思つた。私の講義を聽いていらつしやる時と、遊戲をしていらつしやる時と、更に顏が變つて居る、即ち無我になつて居るのであります。あんまりそんな事を申すと、今日のに影響するといけませぬが、端で見て居ると おかしい樣な方が、實に愉快さうにやつて居る。まあ今

日は私、參りませぬから御遠慮なく……(笑聲)實に無我の極致であります。

美とは、出來上つたものが美かどうかと云ふのはこれは色々な處に行つて訊いて見て、色の調合がどうとか、音が一つ狂つて居る、と云ふ事でありませうけれども、生活に於て美と云ふのは、今の二つであります。結果と云ふ事に使つて居ないのであります。結果と云ふ事を考へて、結果と云ふ要素が入つて居る限り美ぢやない、「この藝術品を買つて來給へ、いざとなれば元値で賣れる」と云ふのは、全く非藝術の甚しいものであります。だから、何か知らぬが氣に入つて、はたいて買つて來て後で公開するところが却々面白いのであります。さうしてそこに我と云ふものが入つて居ない。創作でも我が入つて居ない。そこが、道德、宗教と一寸違つたところであります。

そこで、あの完成したる美の作品そのものと云ふ樣な事は、これは幼兒には却々難しいと思ふ。好きこそものゝ上手なれと言ひますが、上手こそものゝ好きなれ、であります。私は皆樣のことを一寸ひやかしましたけれども、私は如何にあすこでやらうと思つても、スローテンポの時は實にハーッとなる樣な風でありますが、私があれを踊つたつて、とても皆さんの樣に無我境に入れない。何故ならば私は踊れないからです。皆さんは踊れるから、自分の手足の動きを離れて、ひとりでに動いちまふ。中には、左に廻つても構はない程でいらつしやるから、我が抵抗なく流れて行くのであります。あれが一々、斯うやらうと思ふと「あゝ、どうだつたらう。リョーマチが痛い……」と、これは我に還ります。すべつたり轉んだりして、我に還らぬ譯に行かない。だから先づ皆さんがお上手であると云ふ事も一つの條件であります。

そこで、藝術家は上手だから、書いて居る中にきつと出て來るから、容易に無我になれるでせう。私も無我になりかけるけれども途中でガッ〳〵〳〵と閊へるから、スムースに行かぬのであります。斯う云ふ事で、幼兒の美と云ふものゝ生活的意義はさう云ふものであるとした時に、幼兒から、美と云ふものはどうなるかと云ふ事は別として、今の無我のもの

は幼兒の中にあるのであります。吾々は、完全なるものを幼兒に求める事は出來ませぬ。宗教も亦幼兒の生活の中に完全なものを求む可きぢやありませぬ。けれども今言つた意味に於てこの美は、幼兒の中に前から常にあるぢやありませぬか。幼稚園に於てこの意味に於て美的ならざるもの――あのお化粧をした先生は何と實に我が大變でせう。實に我があつてやつていらつしやれば私もお手傳を致しますが――兎に角そんな譯であります。

そこで幼兒は兎に角、無結果、無我式に暮して居る。そこで、斯う云ふ結論になります。

(四)藝術教育と幼兒

藝術教育と云ふものは、藝術と云ふものを立て、それをもとにして幼兒々童の教育の問題を考へて行く事でありますが、その藝術の主なるものは幼兒にあるのであります。私は――これは此處だけの話で、若し御親類にさう云ふ藝術家がお出でになりましたらば、どうか内緒にして置いて頂きますが――やれ大家で御座るの……と言つていらつしやる偉い人の中に、私から見れば幼兒の方がずんと美的である場合が澤山ある。幼兒の方がずんと、本當に藝術的である場合が澤山あるのであります。

そこで鐘も鳴りましたので、一つの結論で今日は終りますが、幼兒に於ては、藝術の爲に藝術教育をすると云ふよりは……藝術と云ふあの文化の山の上に行かせる爲に藝術教育をすると云ふよりは――こゝで一寸切りますが、常に藝術教育の必要の論になると云ふのはその意味で言はれて居るのであります。今から二十年前、我國に斯う云ふ問題が流行しました時などは、さう云ふ意味であつたのであります。さうぢやないと私はこゝで言ふ幼兒の生活が藝術的だから幼兒教育は一體全體兎も角もそれ自體が藝術教育であると言ひ度いのであります。藝術への教育ではない。道德は宗教へ、と云つた意味で藝術へと云ふのでなく、幼兒の生活の本質が美的ですから、幼兒の教育は盡く藝術的、美的なんであります。幼兒

が美的でないから美の教育をするのでなくて、幼兒が美的だから、それに相應しき教育は美的になる、斯う考へ度いのであります。

そこで藝術教育は詰り美と云ふ事の教育であり、美の文化でありますが、これは善の文化の道德教育、又宗教教育と云ふ樣なものと少し趣きが違つて居る。見方が變へなければならぬ。道德教育とか宗教教育とか云ふものは、道德乃至宗教が、その本質的な形に於ては幼兒の生活にはまだないものでありまして、その極く要素になりますものはありますが、文化で謂ふ所の善……と云つた樣なものゝ本質はずつと複雜に發達した後でなければ成立しないのであります。隨て幼兒教育とそれ等との關係は、現在の幼兒生活の中さう云ふものがあると云ふよりも、ずつと遙かなる先の方にさう云ふものがあつて、どうして幼兒の生活を導く……と云ふと言葉が强過ぎますが、志向する——指し示す、どうしたらその方向に向ける事が出來るか。善良なる性情を涵養し、とか云ふ一般的な幼兒教育としての目的をやり乍ら、自らそつちへの方向を失はない樣にする事が出來るかと云ふ問題であります。

これに對しまして藝術教育の中心である美の經驗と云ふ事は、その本質は二つの意味に考へられるのでありまして、道德とか宗教とか云ふものには、別段の作品はありませぬ。詰り何所迄も、その人間の生活そのものが善であり、聖であると云ふだけでありますが、藝術の場合に於きましては——或は繪にしましても彫刻にしましても音樂にしましても、一つの作品として外へ出るのであります。卽ちその作を作つて居る事とその作品と云ふ事とは、別になり得るのであります。道德の場合には、その人間の生活とその行とは別にはなりませぬ。決して別になりませぬ。その人の生活にくつ附いて、その行があるのでありまして、それを切離すと云ふ事はとても出來ないのであります、考の上で、その行と云ふものを綜合して、善だとか云ふ樣な理窟は立てられますが、一々の行を、その人の生活から切離すと云ふ事はとても出來ない。所

が藝術の場合はその繪を描きました時に、描くと云ふ事と、出來上つたプロダクション卽ち作品と云ふものは別に取扱ひます。勿論そこに色々な細かい關係がありますけれども、他の場合に較べれば、別の切離した取扱が出來るのであります。そこで、その作品そのものゝ中にある美と云ふ理窟、それは非常にハッキリしたものであるに相違ありませぬ。その中には、ことによりましたならば、非常な、技巧と云ふものゝ力を俟たなければならないのであります。天才は、不用意に物を作るかも知れませぬけれども、その作りました物が、何故こんなに立派な作品であるかと云ふ時に、その作品の持つて居る技巧價値が勝れたものであると云ふ事になるのであります。その作品は、さう云ふ特別な見方の出來るものでありますが、その作品の作つて行きます生活、これは又、それとは別であります。お互は……と申しては甚だ失禮で、皆さんの中には、藝術家も澤山いらつしやるかも知れませぬが、この私が、藝術家でない者が考へますと云ふと——或作品をする時に、一々技巧的に拵へて、だから技巧的な立派な作品が出來ると斯うまあ思ひます。私が一つ繪を描く時に、どうしようか斯うしようか……紙の上に筆をなするより、筆を舐める方が多かつたりして、その結果、斯うでもないあゝでもないとやつちや、何か出來る。こゝ上げる、作り上げる。所が大藝術家の場合には、作り上げると云ふよりも、それがスッと出來て了ひますから、全く無技巧的である樣に思はれます。あの、非常な偉い修行を積みました畫家が、さつさと繪を描いて居るのを外から見て「あなたの繪は非常にいゝさうだから……」と、一枚千圓だと云ふので千圓懷ろに入れて來たが、見て居るとさつさと描いて了ふので「そんなに樂ならば千圓出すのは惜しいな」と考へる。ヘッポコな弟子の方は、見る目も氣の毒な程脂汗を流して一生懸命描いて居る。文章にしましても、大文豪はスット書き流す。何でもない。「なんだ、直きに書けて了ふから、その作品は詰らないんだ」と思つたりしますが、そのスッスッと書いた中に、出來た作品としては非常に立派なものが出來て來るのであります。

そこのところから考へて見ますと、作品の中に含まれて居る技巧價値と、技巧的にやると云ふ樣な問題とは別になります。私達のは、作り出す手續が技巧的でありまして、出來たものは、まあ技巧の固まりと云つた樣なものになつて了ふ。さうして下らぬけれども「君相當骨折つたぜ」と、作品に要された努力に依てその價値を決めようとする。けれども作家の方から言へば、天才ならばさつさと作つて了ふ。

茲で斯う言へませう。作る方で技巧的に作つたと云ふ事と、出來た中に技巧價値が內容されて居ると云ふのは別の問題であります。樂々の方は技巧價値が入つて居ない樣ですが、その人は、サラッとやつても充分技巧價値が出來る習練を持つて居るのであります。

そこで藝術の問題に於ては、その作品を主にして考へますと云ふと、その作品の中に含まれたる美的價値と云ふものは、多分技巧的であらうと思ひます。ですから、作品が何故美しいかと云ふ事を研究するに就ては、その中に含まれたる「うまいもんだな、遺に。斯う、線が引いてある」——その人は何も、斯うやつて斯うと考へた譯ではない。當り前です。その人にとつてはそれが當然であります。それよりヘンテコな繪を描かうと思つても、描けないのであります。所が吾々にはヘンテコな繪の方が得意でありまして、それを技巧で何とか變へようとするのであります。所が藝術家は、當り前にやつて居ればきれいなものが出る。力んで美しい聲を出さうとしないでも、聲のいゝ人はひとりでにいゝ聲が出る。——私なんかでも、この聲を出すのに永年苦勞して居りますし、この頃だつて茄子のお香々なんかは食べないのであります。(笑聲)けれどもその下手な者から見た技巧と云ふものは拵へたもんだ。偉い人のは技巧的にやるのではないから、出來たものには技巧價値が存分入つて居るのであります。

そこで、その作品と云ふ立場からは、その藝術と云ふものは幼兒にある筈のものぢやありませぬ。幼兒がそんなにえら

い作品を……藝術價値に於て非常に勝れた作品を作る事はないと私は思ふのであります。勿論幼兒が、と云つた所で、幼兒の中にも色々あり、先生よりはいゝ繪を描く子供だつて澤山居ります。居りますが、本當の大藝術家と比較して、幼兒の繪の方が藝術的だと云ふ事は、あれは少し言ひ過ぎた言葉と思ふのであります。そんなものが出來よう筈はないのであります。生みの苦しみと云つた樣なものが藝術家にはあつて、技巧がパッと出て來ますが、幼兒はつひこの間生れた苦しみだけですから、況んやそんなものが出來よう筈はないのであります。ですから人は、幼兒の作品中心の藝術論と云ふものは餘り問題にしたくないのであります。上野の美術學校に行つて、あの頭の毛を長くして居る諸君が「俺の作品は下手くても藝術的だ」と言つたつて、私は困つて了つて點のつけ樣もないのであります。作品で點をつける——幼兒の場合には、作品に藝術價値をそんなに求む可きぢやない。所が藝術教育と云ふ言葉が、大人の場合……殊に藝術が一杯に使はれる時は作品中心の意味に使はれて居りますから、その藝術教育と云ふ言葉を幼兒教育に持つて來て、作品中心の藝術教育に考へられて居るのであります。

所が、作品の方はさうでありますが、作り出さうと云ふ方から行きますと云ふと、美と云ふ態度は、二つの事を本質とするとこの間申上げました。即ちこの中に我のない事であります。セルフがなくなつて居る事であります。隨て……と申しませうか、別の事としても宜しいのでありますが、それ等を手段として、或結果の爲にやつて居ると云ふのでない。藝術からどうなるかと云ふのでなく、それがそれ自體である。作る方から言へば、自分と云ふものがなくなり、作つたものゝ方から言へば、それはそれ丈の事である。この二つの點が生活態度と我々の美であると申しました。そこで、その態度。藝術家とは、或作品をする時に、直きに我がなくなり、打算と云ふ樣なものが、慾なんと云ふものがなくなつて行けるのが、大藝術家の特質なのであります。この意味に於ては、幼兒の生活は實に大藝術家の生活態度と似て居るぢやないか、

等しいぢやないか、このことをこの間申上げました。幼兒の作品と大藝術家の作品とは、藝術品と云ふ事に於ては全く別であります。較べ物になりませぬ。幼兒は藝術家なり、なんと云ふ事を言ふ時には、くれ〴〵もハッキリお使ひ分けにならなければならないのは、その生活態度に於て藝術家であると云ふ丈で立派な作品を作る人であると云ふ意味に於て藝術家だと言ふのぢやないのであります。案外これが混亂致して居ります。これを皆樣にもつと分りよく言ひますならば、私なんか、常に斯う言ふのであります。「私は大家である」と人にも言ふし、自分も思つて居ります。而してそれに條件をつけて、描かざる畫家であり、歌はざる音樂家であり、作曲せざる作曲家であると、斯う言つて居るのであります。さうすると、何を言ふかと人は笑ひますが、私の學說に都合よく、藝術的生活と藝術作品と云ふものをハッキリ區別して——實は出來ないが、こゝに區別して居りますのは、歌はうが歌ふまいが、出來ようが出來まいがそれは別問題であります。けれども、なまじ作りますと、これは作品で我に非ず、と言つても差別がなくなりますから、疑はなければ此方の態度だけで藝術家と言へますから、あの藝術家がインスピレーションが來てワーッとやると同じに、私も時々ワーッとやる。出來榮えなんと云ふ事は別問題であります。この意味で少しも藝術品を作らずに、實に藝術的であるキャラクターと云ふものはあります。これをハッキリ分ける爲に、言葉でもの事を申しますならば、立派な作品を作る人で、ちつとも藝術家でない人も世に澤山あるぢやありませんか。立派な藝術品を作る人で、藝術家でない人がある。

この間も或處で、夏の夜の茶話をした。色々僞造品を頻りに買ふ人があるのであります。買はせられる人がある。所で僞造品と云ふものは、御承知の樣に、本物より巧い事が澤山あるのであります。イタリーの名畫と云ふものは、みんな美術職工がそれを美術館で寫しまして、それを賣つて居ります。或は書なんかでも、僞造が澤山ある。若し世の中に私の書が出て居りましたならば、大抵は僞造であでありますから、騙されない樣になさらないと……(笑聲)そこでその僞造品

――僞造と云ふのは怪しからない樣ですけれども、實は非常に巧い人でなければ出來ませぬ、ですから、作品としては僞造品の方が巧いかも知れないのであります。けれどもその人の生活態度は、僞造しようなんと思つて居る所に藝術家的でない所があるのであります。

斯う云ふ事を考へて、私は幼兒の場合に、藝術教育と云ふ事を持つて來る時に、作品と生活態度とを區別して、作品を……何も幼兒に藝術品なんかと云ふものを求める事は容易でない。後で別な事を申しますが。――然しその生活態度の方に於て、幼兒とは何時でも我をなくするものでありますから、そこで缺いて居る所は、大藝術家であるのであります。もう小學校の上級あたりになると、繪を描くにしても、何點貰へるだらうかと、一寸褒美を標準にして作品を書く。文展出品者の或者の如き態度になります。さうすると、それは藝術ではありませぬ。幼稚園の子供は、餘つ程先生が惡く仕立てた子供でない限りは、そんな事を思つて書きませぬから、書いて居る事は藝術的であります。

そこで、全體を引つくるめて、斯う云ふ結論になる。藝術教育と云ふ事は、その意味に於ては、幼兒生活そのものゝ外に何かゞあつての語ではなく、藝術教育は、生活態度そのものとしては、幼兒の生活の中にあるものである。それをさう云ふ風にして置きさへすれば、いゝのぢやないか。斯う云ふ事と、凡そそれは作品を本意にしての藝術的と云ふ言葉でありませぬから、隨て幼兒の生活の全體の中に、藝術的なるものがあるのでありますから、特に藝術教育の爲にすると云ふよりも、幼兒の生活態度に卽して教育をして居れば、それは藝術教育なのであります。その意味に於て藝術教育なのであります。皆さんは幼兒に歌を一つ歌はせて情操を教育しようとお考へになつて歌はせていらつしやるかも知れませぬ。實際は幼兒は色々な目に遭つて居りますね。「あんたの情操を養ふから、この歌を斯う云ふ樣に歌ひなさい」と云ふので、情操がきたなくなつたりする。けれども先生の計畫としては、情操をよくする爲に歌を歌はせる、これも全く意味のない事

ぢやありませぬ。情操を教育する價値は、あの歌と云ふものに大いにあります。ありますが私は寧ろ斯う考へる。若し七三の區別をつけるならば、斯う考へる方が七の意味になるぢやないかと思ふのであります。幼兒の生活は、理窟よりも、歌に相應しい生活なんである。實に「斯るが故に々々々々々々」と論理的に刻んで行くよりも、或感じを、スッとリズムの中に置かれた子供なんであります。そこで、相手が幼兒だから音樂を尊重するのであります。幼兒は、下等なる、低級なる、美的要素など一つもないものであるから、それを教育する爲に音樂を使ふと云ふ事も三つ位の意味はありますが、寧ろ七分の意味と云ふものは、それよりも、寧ろ幼兒が藝術的なんですから音樂と云ふものを幼稚園で尊重すると云ふ事になるのであります。この意味で、幼稚園の先生は、作品がどれだけお出來になるか知りませぬけれども、これは美術學校を特にお出になつた方でないから、そんなにえらい作品は期待すべきでないと思ひますが、その全體の生活態度は藝術家的な方でなければ、幼兒の教育は出來ないのであります。幼兒の生活が藝術的なものですから、幼兒にどう云ふ巧い繪を描かせようか、どう云ふ巧い歌を歌はせようかと云ふ問題とは別個であります。幼兒教育のさう云ふ本質に眼をつけて來た時に、斯う云ふ事が言へると思ふのであります。ですから幼兒の場合に於て、道德教育や宗教教育と違つて、幼兒教育そのものが藝術教育的であるが故に藝術教育と云ふものが幼兒の教育の中に、その意味で一應持つて來るのである。斯う云ふ事をハッキリ致して置き度いのであります。

まだ何だか私、言ひ足りませぬから、繰返し繰返し申しますから、分つた方は合圖する迄寢て居て宜しう御座います。(笑聲)。

(五)繰りかへし言へば

どうも幼兒が屢〻幼稚園で、お門違ひの、見當違ひの取扱を受けて居る事が度々あるだらうと思ふのであります。幼兒

自身が持つても居ない生活へ道德を要求する事が非常に强く、道德を直ぐ持つて行つたり、幼兒がまた宗教的でない、宗教に向ひ得るだけなのに、宗教を直ぐ持つて行つたりする癖に、藝術的だと云ふ所へは少しも觸れてくれない時に、隨分詰らぬだらうと思ふのであります。この皮肉な實例は、皆さんが立派なる繪をかくしてお出でになる。あの美はしの繪、色ごりの繪、！子供は好きです。ですから赤い繪の具だの青い繪の具だの出して塗るのは子供は面白いけれども、その繪を描いて居り乍ら、子供は直ぐ嫌になつて了ふ。寧ろ外へ出て遊び度くなる。それを先生は直ぐ、懶け者だと仰言る。斯う言へるかと思ふのであります。或人はそれを單に心理的に、幼兒は自由遊戯を好むと言ふのでありますが、その意味を今此處で論じて居る樣な問題にひきつけて來ますならば、取扱つて居るものは成程これは藝術品であります。美の教育教材でありますが、それを取扱はせられて居る態度と云ふものは、餘りにも美でないのであります。所が、外へ出て砂を弄んだりして居る時には、その作品は、幾らやつたつて所謂藝術作品は出來ませぬが、その生活態度は幼兒獨特の無我と無結果主義の藝術生活態度に行く事が出來るのであります。私が幼兒なら、斯う言つて先生の門を開いて上げようと思ふ。「先生、藝術教育とはね、藝術作品を材料としてやる許りぢやないんです。それは藝術技能教育である。幼稚園に於ては、生活の上に藝術と云ふものを置くの。今日外へ出て我を忘れようぢやありませんか。外へ出て、結果を離れようぢやありませんか。そこにこそ藝術が大きな意義を作る事が出來るぢやないでせうか。私は今こゝで藝術攻めになつて居る。」先生は分らない。こんな藝術をと仰言るが、それは作品の方から見た藝術で、生活態度の方から見ては、實に幼兒として苦しいのであります。斯う云ふ事なごに於て、幼兒の藝術教育は、生活の本質に卽する事ですから、幼兒の教育の中で藝術教育をすると云ふのでなく、幼兒の生活そのものゝ本質に卽した教育は藝術教育になるのであります。それで、幼兒が繪が巧くなるか音樂が巧くなるかは別の問題であります。別の問題と私が言ひますが、多分まづい繪を、本當に藝術的に造る

でありませう。まづい歌を本當に藝術的に歌ふのでありませう。一體、巧くなると云ふ考位非藝術的なものはありませぬよ。巧くならうと思ふ。どうも歌の稽古が辛いもんだ、と云ふ……結果は巧い歌が出るでせうが、やつて居る時は實に結果主義でありまして非藝術的であります。だから、歌へば巧く歌へるが自分が歌はないと云ふのは、詰りこれは本當の藝術教育を正しく受けなかつた證據であるとも言へるのであります。斯う云ふ風に考へまして、そこで次の問題に進みます。

(六)生活的作品の藝術

こゝで一寸區切りをつけまして、斯う云ふ譯でありますから……と言ひ乍ら一寸飛びますが「この間論理少し飛躍致し候」一寸飛ばせますと云ふと――幼稚園に於ける藝術教育とは、生活態度に卽して行くのみならず、藝術的作品と云ふ抽象的に拔出されたるものでなく、當り前の生活的作品の中で美の條件を備へさせる、斯う云ふ事が當然の事になつて來るのであります。これは何でもない事ですから、一寸驚かす爲に、分り難く、難しく言ひ出して置きました。美的作品と云ふ特殊なるものを主にしないで、生活作品の中に、美的なる條件を備へて置くと云ふ事でやつて行く、斯う云ふ事であります。

これは例へば、斯う云ふ事であります。人類の藝術の發達に於きまして、總て所謂原始人の藝術は、生活實際の中に、驚く可き美の要素を備へて居ると云ふ事が特質であります。あの原始人の中に、特別に繪ばかり描いて暮して居る繪描きであるとか、特別に歌だけ歌つてレコードに吹込んで居る音樂家とか何とか云ふものはなかつたのであります。

あの、漁に行きます。――これは生活ですね――その間にそこに歌が出て、その歌が堪らなく美的條件を備へて居つた。反對の方は、歌の方があつて、歌を歌ひに沖の方に出ようかと思つて居て、歌半ばにして落ちたりする事が起るのであります。所が原始人の方は、魚が來たと云ふので行く、その間に「あゝ……」と追分が出る譯であります。ですからこれは生活の中に音樂が入つて居る。

原始人は武器を作ります。今日の武器と云ふものは、大した實に武器であります。聊かブキッチョな程、武器であります。所が昔の原始人は、戰と云ふものも呑氣であつたでせう。昔は戰と云ふ命がけのものでも、美的要素を備へて居ります。緋縅とか櫻縅とかの粉飾をしましたが、今の軍服は、見えないのを本體として、帽子の上に草をつけたりする。所が昔は、成可く見える樣にして「ヤァ」とやる。節をつけて「吾こそは――」と言ふ。昔は戰も暇だつたからでせうな。緋縅の鎧でも、爆彈が來た日には堪らないが、兎に角戰爭と云ふ命がけの中に、美的要素を持つて居るのですから、その武器なんかでも、――今の鐵砲なんかは、一種の美は備はつて居りますけれども、別に鐵砲に飾りがしてある譯ではない。昔のは一々紫の絲など引きつけ、お祭に行くかどうか分らぬ樣な太刀を佩いて、弓だつて大變に氣取つて居ります。戰に行く人がその位ですから、家で働いて居る人なども、擂鉢なんかに一寸彫刻をつけます。今の奥さんは擂鉢を買ひに行つて、模樣がついて居るから五錢高いと言へば買はない。「これはどれでも味噌擂である」と實用主義であります。これ（机上のコップを指す）なんかも、露骨に言へば、水が漏らなければいゝ。私は講義をして居る間水を飲みませぬけれども、チラ〳〵模樣が入てれありますので非常に慰められます。これは美術品でせうか工藝品でせうか分りませぬ。卽ち生活の中に美の要素があると云ふのは、その意味であります。斯う申しますと、藝術と云ふものは餘りにも實用主義と云ふ事になりますが、さうぢやない。これをやつて居る時には實用主義ぢやない。どう云ふ模樣にしようかと、我を忘れて作るのであります。私もこれを見乍ら「成程、斯うなつて居るので滑らなくていゝ」と云ふ、そんな變な事を思ふのでなく、これはこれで樂しんで居る。水を飲む、と云ふ實用の中にこれがあつて、唯ガラスの板に傷をつけて、キラ〳〵するのを眺めて居ると云ふ、そんなのぢやないのであります。

ですから幼兒の場合は、生活態度そのものが本體の藝術生活をして居つて、幼兒の場合に濫りに作品本位に藝術教育を

する事は行き過ぎて居るこ云ふ結論になるのでありあます。だからこ云つて無趣味で、美こ云ふここなごはごうでもいゝこ云ふのではない。生活の中でやるのであります。

この意味を、一寸極端に持つて行つて見ませう。さうするこ、音樂の爲に音樂を歌はせたり、繪の爲に繪を描かせたりするこ云ふ事は、既に幼兒教育こしては一寸妙だこ云ふここ迄も行きさうな問題であります。斯う私結論するのぢやありませぬ。後で他の事を申しますが、さうまで行かうこする、それ許りぢやありませぬ。今日の幼兒教育或は小學校教育、さう云ふものゝ傾向が餘りにも、從來あの小さき小供の生活を捉まへて、作品本位の藝術教育に走り過ぎて居りました。その反動こしては寧ろそれを抑へて、作品の價値ではなく、生活態度の中に美的要素をごう入れようかこ云ふ事になつて居る。その進んで行き方に於ては、小學校に圖畫こ云ふものはないのであります。音樂こ云ふものはないのであります。總ての生活の中に音樂が入つて居り、繪が入つて居るだけで、圖畫を圖畫こしてやるこ云つた樣なこの時間は、純藝術作品の時間であるこ云つた樣な事を止めようこ云ふジエネラルアートシステムこ云ふ事に今日はなつて居る譯であります。こゝ迄行く事がいゝか惡いかは兎に角、そこ迄考へられるのであります。私は大體に於きましてそれを併せてお聽き願ひ度いこ思ひますが、大體に於きまして、幼稚園で藝術を藝術こしてするこ云ふ事が、尠くも今迄少し偏り過ぎて居るこ思ひます。それが藝術教育の名に於てそれがさう云ふ風になつて居るこ云ふ事を私は訂正したいこ思ふのであります。私はよく惡口を言ふけれごも、幼稚園は、「幼稚園音樂學校ですか？幼稚園美術學校ですか？」こ惡口を言ひますのは、そんな感じを免れないのであります。

もつここれを實際的に言ひますならば、所謂今日の生活的作品こして最も顯著なものは、私共の常に主張致しまする誘導保育に於ける手技の樣なものであります。誘導保育の中に行はれて居ります手技こ云ふものは、何所迄も手技こしてや

る反對のものであります。誘導保育と云ふ生活テーマがあつて、その生活テーマから引出されて來て、或品物を一つ作る時に、その生活主體に依て出來て居るのでありますから、生活的意義を持つて居る譯であります。「お人形の爲に椅子を作りませう、テーブルを作りませう、ベッドを作りませう、お蒲團を作りませう」と言つた時に、これは、お人形と云ふものが寢ると云ふ生活を本體にして作つたのでありまして、ベッド藝術、蒲團藝術、椅子藝術、テーブル藝術と云ふ樣な事をさせるのでない事は明かである。極端に、どんな美しいものが出來ても、寢る事の出來ないベッドは許さない。誘導保育でも、人形の大きさにいゝ椅子を作らなければ絕對に許せませぬ。これまで實用的に保育が出來て行くその中へ、やつぱり蒲團は模樣を氣にします。テーブルは形を氣にします。一寸赤い紐をつけまぜうとか、一寸線を入れませうとか云ふ事を考へます。これは詰り生活的作品の中に美的條件を入れて居ると云ふ事であります。この意味で、幼稚園の藝術教育は、どこ迄も生活態度の藝術的であると云ふ事に中心を置いて考へた。その結果、二段の結論としては、藝術を藝術としてするんぢやない。生活的作品、生活的行動、その中へ入れて行かうとするのであります。

斯う申しますと皆さんは「愈々これは幼稚園の藝術味と云ふものが減つて來た、どうも私は、あの音樂と云ふ時間が特にあるので閉口した」或は「繪と云ふのが特別あるんで、私は繪が下手で、藝術教育の指導が出來ないので困つて居つた。所が今の話を聽くと云ふと、生活の中に美的條件を備へさへすればいゝと云ふ事だからこれは非常に樂になつた」と仰言るかも知れませぬが、大いにさうでありませぬと。藝術を藝術作品として出して行く時には、一種の道樂性が混ざるのでありまして、いゝ加減な人間が藝術の眞似をして居る位、いゝ加減な事はないのであります。繪の下手な奴が山だが岩だか分らぬものを描いて喜んで居る、これを道樂主義と申します。實に、下手な人が集つて演奏會をして居るのは聽いちや居られないんですけれども、暇と云ふ條件に於て藝術的ですから許し合つて居るが、あの敵を討つ命がけのものゝ中に入るの

は、餘つ程しつかりしたものでなければ藝術になりませぬ。――皆さんにおかしな例を引きますが、幼兒の藝術を研究しますには、原始藝術を研究する事が必要でありますが、原始藝術を拵へたものなんと云ふことも嫌味なものであります。有邪氣の御婦人の樣なものでありまして、見ちや居られない。斯う云ふ意味から、今日幼兒教育の藝術方面の研究に材料になるのは、所謂げてものであります。げてものと云ふのは、所謂本格藝術家が作つた藝術品でない。丸谷さか何さか云つたら高いでせうが、安い土瓶――一つ五錢か十錢位の――を荒物屋で賣つて居る。まさか「少し洩りますからまけて置きませう」なんと云ふ事は商賣にならない。その土瓶に一寸蘭が描いてある、一寸蟹が這つて居る。誰も、蟹や蘭や山水の故に買ふのでない。これが藝術土瓶なんか買ひに行く時には、その繪で買ふ。けれども、實用品にちよつ〳〵と描いてあるのはげてものであります。藝術的の土瓶と云ふものは、或陶工が一世一代と思つて拵へるのですから、一寸缺片一つでも百圓の値打が當然するのであります。さうしてそれはいゝものに相違ない。それは土瓶ぢやないんですね。その繪と云ふ藝術です。所がげてものゝ方は、日給貳圓とかそこらの職人が、サッサと澤山描いて行く。蘭を一萬個なんて云ふと、パッと描きます。今日は蟹が一萬個、と言ふと、チョッ〳〵と描く。だから描いて居ると云ふ氣もなし、一體何を描いて居るか分らない程描いて、サッサと出來て行く。だから一つ々々は實に粗末な、ぞんざいなものであります。所がその一萬個の中に、一つか二つか三つ非常にいゝものが出來ます。大藝術家が一世一代に描いた蘭よりも、そのサッサと描いた中にたまらなくいゝものが出來る事がある、このげてものが、幼兒の繪を私達に實に考へさせるのであります。げてものは其處らに澤山轉がつて居ります。然しげて職人は、色紙を出したり、絹を擴げたりしたのでは描けませぬ。そんな事をすると、「さつきのは製作品だが、今度のは藝術作品」だと云ふので、實に變なものが出來て了ふのであります。私は、幼稚園の子供に形式的に繪を描かして、子供は何の氣もなく描いて居りますが、それが藝術教育だと云ふこれが非常に間違つて

居ると思ふ。何故もつと製作品と云ふ意識の中に藝術作品意識を離れて美の要素を發揮させないのでせうか。斯う云ふ問題を言ふのであります。

まあ私は大體に於て、幼稚園のさうした問題は、少し當り前に行き度いと思ふのであります。道德の場合に於て、私は道德教育のこころはほんの一寸しか申さなかつたのでありますが――道德とは、生活から拔出されたる高い文化であります。容易に普通の生活の中に道德と名を付ける事の出來る程偉大なるものは見付らない樣であります。私達は眞心の生活は御座いますし、現實に卽した生活は御座いますが、これが喜であると名を付けられる生活は滅多に出來ないのであります。その道德と云ふ教育でさへもが、私はあの系統保育案の中に擧げてあります樣な工合に、道德訓練と名を付けないで、生活訓練と云ふ名でやらうとして居ります。あの系統的保育案の中に、生活訓練と云ふ字が擧げてあります。訓練とは、詰り善に向つて訓練する事です。訓練の狙ひ所はグッド――善でありますが……隨て道德だけを持つて居るものでありますが、それを、道德とか作法とか云ふ文化上の言葉を擧げてさへ生活訓練として居りますのは何の意味であるか。卽ち幼兒の場合に於て、道德を道德としてさせるとか、作法を作法としてさせると云ふ事を成可く避けて、生活の中に於て道德的の訓練の出來る、そこを狙つて居るから、あの生活訓練と云ふ字を使つて居るのであります。道德教育に於てさへ、生活訓練と云ふなら、幼兒教育に於ける藝術教育に於ては、何所迄も生活藝術教育――生活の美的陶冶と言ひますか――それでなければならぬのであります。

(七)美を美としての純藝術味

斯う云ふ事をまあ考へまして、これで終つちまひますと云ふと餘り其方に傾いて了ふのでありまして、後の事をお待ち願ひ度いのでありますが、一應こゝの所では……餘り彼方此方考へますと弱くなつちまひますから、こゝの所を一つうん

と考へて頂き度いのであります。

日常生活の中で美的要素を發揮させる。これは今、なまはんかにチョコ〳〵と藝術と云ふ名でやつて居るものよりも、本當に美的な價値を持つて居るものを入れて行くと斯う云ふ風な行き方で工夫出來ないかと思ふのであります。これが稍〻さう云ふ傾向になつて居りますものは、お話かと思ひます。

一寸又色々な事になりますが、一體あのお話と云ふのは・・・幼稚園令に於ける談話と云ふのは、御承知の樣に、所謂生活的な話と藝術的な童話のお話と、この二つを含んで居るのでありますが、その所謂お話として獨立して居りまするあの童話、これは實に藝術的なものなのであります。私は「童話を人の前で話す」と言つて、實に藝術的習練、訓練のないのにぬけぬけとやつて居るのを見ました時に、私は實にすが〳〵しいと思ふ。「君に今音樂を聽かせるぜ」と云つて私の前に來て、調子外れの聲でやられた日には堪らないでせう。歌を歌つて聽かせると云ふ時には、斯くもまけたらう位の聲は出て來なくちやならないのであります。（笑聲）けれども實に調子つ外れでいゝ氣持さうにして居る。その男が「まあ今日は勘忍してくれ、一杯やつて聽かせてやりてえんだ」と言ふなら、私は生活の聲ですから許します。「それは結構だね」と言つてやります。これは調子つ外れでも何でもいゝ、寧ろ調子つ外れがいゝ。けれども、歌を歌つて聽かせる時に、調子つ外れなんかやられちや堪らない。お話だつてさうだと思ふんです。お話とは、人間生活の色々なものから、ストーリー、テリングアートが拔出されたら藝術品であります。久留島さんのお話は實に藝術です。一つの話を一つの藝術で苦心慘澹して、あそこをあゝ云ふ風にする。岸邊さんのも實に藝術品です。その流派が、どれが好きか嫌ひかと云ふ事は別問題ですが、兎に角藝術です。それを、いゝ加減にやつて居るのは實に亂暴だと思ふのであります。だから幼兒に話をすると云ふ時には、その人は本當に、ストーリーアートと云ふ・・・三味線こそ要りませぬが、藝術的なものを持たなければならないので

あります。「猿だつたかな、猫だつたかな?。一寸待つてくれ」なんと云ふ話は、人を馬鹿にして居るのであります。話すたんびに變つて來る話と云ふものは、實に亂暴なのであります。だから私は、童話と云ふものが非常に藝術だ……ストーリー・テリングアートと云ふものは、さう云ふ意味で見るのであります。

斯う言ふと、皆さんはビクッとして涼しくおなりになつたでせうが、所が遺がは皆さん、その純藝術であるストーリーアートを、日比谷公會堂でなさるのでなく、歌舞伎座でなさるんぢやなく、大阪は花月の寄席の棧敷でなさるんでもなく、幼稚園の生活の中でなすつていらつしやるから、實に皆さんとしては本格的に藝術的なる童話を、何と生活的に訓練していらつしやるから、實に敬服に價するのであります。皆さんは、童話を童話としてなさると云ふ事は幼稚園でお思ひにならないでせう。幼稚園でなく皆さんに「本日は何々御誕生日に相當致し、童話を一つお願する」と云ふ事であつたならば、皆さんはそこで純藝術的にお話になるでせう。さう云ふ事が、皆さん出來る方です。これが若し逆に、皆さんが幼稚園でお話をする。「皆さん、いらつしやい。藝術的お話をします」と言つて「さて……」なんと言つてやつたならば、これは却つておかしい。おかしいごころぢやない、幼兒は實に樂しくない。「いゝ聲だね、先生の聲は……」「巧いね」と言ふ時に、幼稚園で先生と暮して居る生活觀と云ふものはなくなつて了ふのであります。ですから私は、幼稚園の話は幼稚園話でなければならぬ。それはあの藝術家の話と違つて、幼稚園の話は出鱈目でいゝ、とそんな事を申すのぢやないのです。幼稚園だからあゝなるんです。これに較べまして、ごうも他のものがさう話せませぬ。――一寸皮肉を言ひます。唯、幸ひなるかな皆樣が、繪にしても音樂にしても唱歌にしても、純粹藝術作品の境地にまで行かない爲に、自ら樂になつて居る事がある樣であります。私は、戸倉先生を幼稚園に聘したいと思ふけれども、戸倉先生が毎日あの上手なやり方でやられたら、幼兒は「ハー!」と感心して、見物氣分になつて了つて、共に踊らうとしない。「どうしてそんなに大きな身體で輕く飛べる

か」と言つて、技巧を見物する。所が幸ひに皆さんは、實に親しみ深き踊り方である。感服する迄に至らない。「先生一つ御一緒に……」と行く樣な——。だから皆さんが餘り藝術的にならないので、事は極めて無難に行つて居ります。

幼稚園に於ての藝術教育は、作品を本體とした藝術教育ではないのが本質であると云ふ所に私のお話を結び度いのであります。

どうか、お話が、あの藝術的ストーリーアートが、皆さんに取込まれて居る樣に、繪がもつと生活の中に入り、曲譜がもつと生活の中に入つて行く樣な行き方を、幼稚園としては考ふ可きぢやないかと思ふのであります。これは、そつちに偏してのお話をぐつと致しましたので、もう一つこれにつけないと不充分であります。

では一寸休みます。

(八)幼稚園と純藝術

所で斯う云ふ風に考へて來ますと、皆さんのお心持の中に起る或一つの結論と言ひませうか……氣分と言ひませうか、そつちから問題を見て行きます時に、それでは繪を繪とし、歌を歌とし、純粹藝術的なものと云ふものは、幼稚園に於て全然なくなる可きであるか、斯う云ふ問題であります。

これに就ては、斯う云ふ風に考ふ可きぢやないかと思ふ。先程來、原始藝術に於きましては、生活の中に美的要素と云ふものが含有されて居るけれども、それは何所迄も藝術それ自體として生活から遊離して來たものでない。その標準に於て幼兒教育に於ても、生活から遊離させない樣にしたいと斯う云ふ意味に先程の話はなるのであります。遊離は致しませぬが、然しその生活の中に行はれた美的要素が、二つの意味で生活の中へゴシャ〳〵に入つて了つて居るのでなく、それ自體として拔出されて來る場合があり得る譯であります。

一つの場合は――これは少し理窟つぽい事になりますが――詰り、やつて居ります中に人間はその生活の中に、所謂道德の眞心と云つた樣なもので、美的自然生活から、ヒョッとさう云ふものをやるのですけれども、然しそれがそれとして興味を持たれて來ますと、人類の場合に於きましてはそれとして興味を持つだけの暇が出來て來るとさうなるのでありますが、忙しい最中には何所迄も製作品であつて、その中に一寸趣味を入れるだけですけれども、それが暇になれば……もう一つ例を取りますならば、戰の最中に鐵砲を拵へる、その鐵砲にも一寸模樣を入れましたが、暇になれば、武器の所は別にして、模樣の所だけに興味を深く持つて來ると云ふ事もあり得ます。擂鉢に一寸繪を描いて、忙しいが用が濟んで了へば暇にあかせて美的に興味を持つ事もありませう。卽ち人類の美的文化と云ふものゝ發達は、暇と云ふものがあつて出て來て居るのであります。現實の生活に追はれて忙しい中に美はあるが、美は藝術として獨立に遊離して來る遑がないが、暇があるとそれが出て來て、爾來藝術などと云ふものは暇の問題になつて來るのであります。

幼兒の生活は、寧ろ絕對に暇であります。そこでその生活の中でやつて居りませう。例へば誘導保育で店屋を作り、店屋の看板がなければならぬと云ふので繪を描く。何所迄、と云ふ樣な、繪を繪として描くのでないので、看板を描いて居る。これが非常に貴いところであります。「さあ、繪の稽古をしませう」とか、繪を繪として「描けるかどうかして見ませう」と云ふのでなく、看板を描きませうと云ふので描いて居る所が面白い。然しその看板を描いて居る中に、看板を離れて、繪そのものに興味を持つて來ると云ふ向き方はあると思ひます。ありましたならば、その看板は……例へば今日なら今日直ぐ必要ですが、看板は巧からうがまづからうが、店開きまで必要ですが、そこで餘り藝術を論じたのでは間に合はないので、店開きに間に合ふ事が本質でありますが、子供としては繪そのものに純粹な藝術興味の方に行く素地は充分あるのであります。この意味からして、幼兒の一方が其方へ向つて來て居る時に、そこで始めて幼稚園で藝術が藝術として

生活の中でなく一寸離れてそれ自體のものとして與へられて行くと云ふ事はあり得ると思ふのであります。これは例へば誘導保育案で皆さんが頻りに問題になさる一つの點は、誘導保育案と云ふものでやりますと云ふと、あの幼稚園令に謂ふ所の保育項目が……あの誘導生活の中に採入れられた保育項目が、保育項目であり乍ら保育項目でなくなつて了ふのが誘導保育案の特質であります。極言すれば、保育項目の單獨性をぶち毀す爲に誘導保育案が出て居ると言つてもいゝのであります。即ち誘導保育案では、手技を手技としてやる事はないのであります。誘導のテーマの中でさう云ふ事をやつて居るので、保育項目だからやつて居るのぢやないのであります。然るに私共の系統保育案に於きましては、課程保育として誘導保育案をあんなに主張して居り乍ら、矢張り觀察は觀察、圖畫は圖畫、唱歌は唱歌、手技は手技としての課程保育が別にあります。こゝの所を、多くの方が、非常に頭のいゝ方は殊に鋭く突込んで、矛盾して居ないかと仰言るのであります。この矛盾しないかと云ふ事は、私から言へば矛盾して居ないのでありまして、吾々誘導保育と云ふ生活保育の中でやつて居る中に、幼兒自身が幼兒自身の要求程度に於て、今の、看板を離れて繪そのものに興味をずつと向けて行く、店を作る爲に作つて居ります中に、不圖その作り方そのものに向つての、巧く出來るとか出來ないとか云ふテクニカルの方に子供が興味を向けて來るのは當然と思ふ。折角觸れて來たのにそれをぶち毀すのは、その文化的發達を妨げる所以で、これはこれとして指導するのが當然と思ふのであります。即ち課程保育の本質は、生活の中から其方へ少し進んで來た、それに順應する爲にやるのであります。これは實に當り前の事ぢやないか。私共は花壇の植物を觀察させる爲に、初めから觀察の名に於てこれを見ようと云ふのでない事は常に力說して居る。花壇に水をやる事は、觀察の初めで途中で終りだと云つていゝ程、觀察であります。何も觀察とは花壇の花をぢつと見て「長く見たらボーッとして了つた」と云ふのが觀察ぢやない。水をかけてやると云ふ事に於て實物に惹きつけられて行く。そこが大きな問題で、これを或は生活觀察と云つて

もいゝでせう。願くはそれでおき度い。バッタの觀察は、バッタを追かける事にあるので、模型なんか持つて來るのがバッタの觀察ではない。だから生きて居るバッタを追かけて「早いもんだなあ」「いやに飛上るなあ」と云ふのが詰り觀察の初めで、恐らく終りもそこに來るでせうけれども、水をやつて居る中に、白い花と赤い花とある事に氣が付いて如露を置いてその花を見て居たら「そんなことをして居ちやいかぬ」と云ふのは亂暴だと思ふのであります。水撒き人夫には私はさう云ふ事は許しませぬ。花を見て立止るのは生意氣だと言ひますでせうが、水をかけさせるのも實は教育ですから、その教育は、花に興味を持つ教育ですから、興味を持つと云ふ事が、如露を置いてまで、「アラ、マア！」と言つた時に先生が「色々な花に水がかゝつて、遂に濡れたるこの姿かな」と言つて居るのでなく（笑聲）「赤いのね、色々あるでせう？」とか云ふところに先生がちやんと行けるだけに其方をやつたつていゝし、やるのが當り前だと思ふのであります。我々が、味の爲に食物を食べて居るのぢやありませぬ。味だけ私に食はすと云ふ人があつたら私は閉口です。「味だけ上げるから食べちやいかぬ、舐めろ」と云ふのでは困る。所が私の空腹に對して、食物の本質上、腹に應へる爲にくれる食物として食べて居ると味がある。味があるが、餘りにも美味いと云ふと「お腹が張つたが、もう一つ……」なんと云ふのは、今度は味の鑑賞だ。私は、御馳走を食べた時に美味いと先に言ふのは失禮だと思ひます。先づ食べるのが本體かと思ひます。食べて了つて味を忘れても、餘りに此方が味なき話でありますし「もう一杯貰はうか」と云つて、サーッと食べて了ふお茶漬なんか、味ばかりやつて居たら美味くないです。そこで、その花に水をかけて居るが、花にアッとなつた丈でいゝ。そこに課程保育が起る。人形の椅子を作つて、サッサと腰掛けたらそれでいゝが、職人ではないから、やつて居る中に椅子そのものに興味が出來て「椅子を作つて見よう、斯うして見度い」と言つた時に、それをそれとしても當然ぢやありませぬか。幼稚園保育項目を授ける爲に課程保育をするのでなく、生活の中からそこ迄自然に來た時に課程保育が出て來ると云ふ順序になつた

事は、決して矛盾ぢやないと思ひます。

これと大體に於て似て居る問題が、今の藝術の場合もさうであります。幼兒は生活でやつて居るから、美を美としてやつて居るのぢやない。美の要素が入つて居るだけの事で、美とも知らずに愉快にやつて居るだけでせうが、そこ迄興味が進んだらそれを取出して、私の聲が變だと云ふなら「いらつしやい、やつて御覽なさい」と言つたつて構はないのであります。「一寸あんた、繪を描いて御覽なさい」子供がさつき生活の中でやつて居たから忙しかつたが、繪を繪として今度やつて見ろと言つてもいゝのであります。生活の中でそこにエンバヂスを置いて來れば、課程保育として當り前ぢやないかと云ふのであります。斯う云ふ意味で、あの生活の中で美的要素を備ふべき大體の問題が其方にも行き得る途があると思ひます。

もう一つは、これは少し意味が違つて居りますが、今のは、その生活の中に於ける美的要素に向つて非常な興味を惹きつけられた場合でありますが、今度は、本來その子の元來の立場に於て天才性のものがあると思ふのであります。天才性のものとは、天才とは何だと云ふ事は言ひ難いのでありますが、先づ現實實用と云ふ樣な事の方に非常に向く傾きでなく、一種の抽象的な、それ自身をそれ自身として興味を持ち、其方に惹かれる樣なバレントを持つて居るのを普通の天才と申します。それで、實用的タイプでなく、學問なら理論派、藝術なら創作派と云ふ特殊な傾向を多分に持つて居る子供がある場合に、其方に伸びるのは當然と思ふのであります。若し幼稚園の子供全體に向つて、美を美として要求する事は、さう常に出來る譯のものぢやありませぬが、その中に、其方の傾向を充分に持つて居る天才的子供がありました時に、幼稚園では何所迄も新式生活主義だからと言つて了ふのは少し亂暴だと思ふのであります。斯う云ふ譯で、矢張りその生活的の中で、美が美として純粹に行はれて行く要素を持つのであります。

(九)結びの言葉として

そこで斯う云ふ事を一つ引つくるめた結論……と云ふ程でもありませぬが、そこに結びつけての引つくるめた事を考へて見ますと云ふと、今申した樣な事の御諒解を助ける爲に、一般的の一つの理窟の樣な事を申して見ますと、私共の教育に於きましても、その教育の目的となつて居り、子供をこゝ迄斯う云ふ風にと考へるものは、人類が長い間に拵へました或一つの文化的發達の樣なものであります。それを、後から來た子供に、斯くなせと示して行くのが普通の教育目的であります。然し教育にはもう一つの意味があつて、子供の生活の中から文化を發展さして行く。これは當然な一つの途であります。

そこで、子供の生活の中から文化を發展さして行く樣な場合には、先づ子供に、この文化へ持つて來いと云ふ命令を下す前に、先づ生活を豊富にして、その生活の中に文化價値を發見して行くと云ふ一端を、充分に力を盡さなければならない。これが幼稚園の幼稚園たるところであります。然し乍らその生活の中にあると云ふ事に於て行きますが、人類は長い間に文化迄來たのを、吾々は教育に於て短い間にそこ迄持つて來る。その爲には、生活は生活、文化は文化としたのでは、ぞこ迄もくつ付きませぬので、その生活の中から文化へ行く、その行く途を吾々は矢張り認めて行かなければなりませぬ。行く途と云ふのは、今の藝術の場合に於きましても、製作品としてやつて居る中に、美なら美それ自身の興味に、微かに進んで行く子供の中から起る要求を認めて、引張つて行かなければならないのであります。斯う云ふ原理に今のはなつて來ます。唯茲に非常に問題になります事は、何故私が生活と藝術の事を言ふのにこんな事をするかと云ふと、その生活の中から抜出して段々文化の方に進んで來る途を認めます。けれども吾々は、この文化へ子供を持つて來るのが目的であると共に、文化へ來る健全なる發展性を與へる事が目的である。こゝをハッキリ區別して頂き度い。何でもいゝから文化に

到達せしめ、文化を與へればいゝのでなく、文化へ發展して來る發展性を尊重して居るのであります。文化へ發展して來る自然の途と言ひませうか……その發展性を尊重して居るのであります。ですから、文化へ生活から行くには、生活から多少離れて進んで來ますけれども、それは何所迄も文化的內容價値の發展に連れて、生活から分離して來る事を條件としなければなりませぬ。文化的生活價値から進むから生活から離れて來る。繪を描いて、巧く興味を持出したから、つひ儲けも忘れ、食も忘れて繪の方に行く、と云ふ順序でなければならぬのであります。文化價値の內容の發展に正比例して……と云ふ程ではないでせうが、それに比例して生活實體から離れて行く事を基準とし、それならば許す。そこに、生活から文化への發達性の原理があるからであります。然るに、若しもその文化價値內容がそこ迄行つて居ないのに、まだ生活から分離して來る形になつたならば、これは困るのであります。こゝが大事な問題であります。

まあ甚だ妙な例でありますが、若しこの中にさう云ふ方がおありになりましたならば、御心配なくお聽き願ひ度いと思ひますが、月滿たずんば生れちやいかぬのであります。所謂お腹の中の子供が分離して來るのです。何時迄も分離しなかつたら大變です。子は親にくつ附いて居るものであると云ふので何時迄も訓練しなかつたら大變です。人間が出來ませぬ。文化々々と言ふのは、月滿つからぢやありませぬか、中が充實するからぢやありませぬか。中が充實しない中に出て來るものぢやない。これは實に、こんな處で言ふ可き事かどうか知りませぬが、本當に自然の原則の一番奥底に示して居る例であります。我々の生活の中から、文化と云ふ獨立の子供が生れて來ます時に、その文化內容に伴はずして文化內容價値に伴はないで、生みの惱みを經て生活から分離するのが本當で、それを吾々は助け度いのでありますが、それを早く分離さしたら……これは實に重大な問題であります。道德なるが故に自分自身を生活の中に充實される中に、道德を道德として行つて來たりしたら、月滿たざるに生み出した道德と同じぢやありませぬか。殊に作法に就て私が常に言ひ度いのはそ

こです。作法とは、人類文化の間に發展したものであります。殊に日本等に於て、足利期から德川期に於て、色々な作法が發展して來たのであります。然し乍らそれは作法として、我々の生活、人類總體に持つて居るので、私が作法を持つて居るかどうかは別問題であります。私の作法は私の文化價値に相當して出て來るものでなく、習へば誰だつて出來るのであります。

道德も同じですけれども――作法は形に出ますから話がし易いのでありますが、道德もさうだと思ふ。――自分の價値以上の道德をする事は餘りいゝ事ぢやないと言ひ度い位ですが、そんな事をウツカリ言ふと、「俺の價値ぢやないからやらない」とか言ひ出したらきりがありませぬから、道德の方ぢや我慢します。然し乍ら子供なんかの場合に、吾々は實はそこ迄熟して居る可き筈ですから、熟して居る可き事として要求されてもいゝが、子供の場合に於ては、熟して居ないのが當り前ですから、子供が餘り偉いのをやつたら、チャンチャラ可笑しいのであります。だから作法を作法としないで、生活訓練と云ふだけでやらうとするのであります。歩き方を拔出さうとしない。その生活の中でそれが相當の力で歩くだけ、それより他に本當の途はない。

この論法で、美と云ふ事も、自分の生活の中に卽して來る美的價値が進んだならば、生活から分離して宜しい。私は大藝術家が、經濟的問題社會的問題、人との交際、常識的交際……あんなものを無視して繪畫三昧に入つて居る時に、決して咎めませぬ。何故ならば、その人の文化價値は、餘りに今の普通の生活常識から離れて了ふ程、文化價値そのものが充實して居ますから、それを順を間違へて、美の教育と云ふ中に於て分離する方を先に要求したならば、これは順も間違つて居るし、一度分離したならば、もう育ちませぬ。生んで了つたならば箱の中に入れて溫めたりしますが、さう云ふ事で育たないのであります。ですから、私は、幼兒をその生活から人類の案出した文化へ持つて行かうと努力しますが、――

何でも、斯うする樣です。發展性を自ら養はうとしてやる事は、この文化價値が、人類としては行つて居るけれども、自分としては行きつゝあるから、內容充實に比例して分離して行く行き方をしたいのであります。この內容充實に比例する生活からの分離、こゝの所は、私共殊に幼兒教育に於て大事な事と思ひます。先生が非常に高い立場にいらつしやると云ふと、これはもどかしいものであります。殊に天才の先生なんと云ふのは時々困るのであります。天才先生と云ふのは、生れ乍ら生活から分離して居る傾向を持つた方ですから、それが當り前と云ふ生活意識を持つて居るから、子供の生活にそれがついて居るかどうか分らない。殊に專門家と云ふのが幼稚園では非常に困る。專門家とは多分、分離しきつて居る所の專門家である事を誇つて居るので、生活そのものから離れて居るが、專門家たる誇りを持つて居るから、生活へくつ付いて行く味とか、止むを得ず生活から訓練して行くと云ふ生みの惱みといふものは、これはどうも出來ないのであります。子供を生んだ事のない人、子供と云ふものは始終貰つて許り育てゝ居る人、こゝの所に非常に問題が違つて來るのであります。詰り抽象と云ふ樣なものが教育の目的ですけれども、その教育をそこに持つて行くに就ては、今言つた樣な細かい順序が當然の事になつて來るのであります。この意味で私は道德教育も宗教教育も皆考へますが、どれもさうでありますが、然し道德とか宗教とか云ふものは、子供の中から自然にそこに行くと云ふだけではない。非常な高い文化があるのでありまして、その文化の如何と云ふものでもつてそれへ行かうとするのでありますが、然し美と云ふ場合に於きまして、生活の美的意義は前から申して居る樣な意義でありますが、これを抽象させたら藝術でなくなつて了ふと云ふ事になるのであります。これで一段落の話は終ります。もう一つ、藝術教育に就て殘つて居る事があります。それは、斯う云ふ事であります。

道德教育の場合にはその道德教育の方法と言ひますか、途として例を示すと云ふ事は却々難しい事であります。よく先

生は樂々言つていらつしやる。「先生のやうにしやかにおなりなさい……。」「やうに」と云ふのは、「ぐらゐ」と云ふ位の意味に解釋して置けばいゝ。殊に道德とは形ぢやないから、昔の人が斯うして〳〵と云つても道德の例になりませぬ。一番難しいのは從順の例話でありまして、從順の例話位、子供に全く見當違に取られる事はないのであります。えらいなあ、えらいなあと言ひますけれども、どこが偉いか分りつこないのであります。殊に、世の中には實に不道德的生活の現れをして居る人もあるのですが、こんな事は例に持つて來られます。「惡人なれども眞心なり」と云つた樣な事は、例に過ぎませぬ。作法の方はやつて見せる事が出來ますが、やつて見せると云ふのは、作法の本質に離れて居ります。作法とは、やつて見せると云ふ事ではないのが作法の本質ですから、そこで作法と云ふ問題は、そこの例を示すと云ふ事は難しい。首の上げ方、手の動かし方と云ふのは示せますが、作法と云ふものゝ例を示す事は出來ませぬ。宗教經驗に就ても、例を示すのは難しいのであります。まあ佛壇に向つて跪いて居ります後姿と云つた樣なものが或感じを子供に與へると云ふ事は常に申しますが、それも子供に依て、例としてやる譯に行かない。宗教的生活と云ふものは、子供に特に見せると云ふ譯に行きませぬ、宗教觀察と言つて、觀音樣の前で人が拜んで居るのを見て「觀察なら致します」と言つても、分つたものではない。

所がこれに較べて藝術は、道德や宗教と違ふと言つたさつきのお話と並べましてもう一つ違ふ所があるのは作品と云ふものがあります。作品と云ふものが生活から離れて存在して居りますから、繪を一枚描いても直ぐ例になる。例と云ふのは手本ではないが、所謂人類文化の持つて居る最高の美と云ふものゝ一例が出せるのであります。曲譜一つ自分で書かなくても蓄音機をかけて立派に例が出せるのであります。この、出せると云ふ事が、藝術の他のものと違つて居る點であります。そこで藝術生活としては、この例を示して斯う爲せと云ふのでなく、その生活から段々發展して來る事を冀うて居

るのでありますが、例を樂に示せるこ云ふ事から、別個の問題が一つ起つて來るこ思ふのであります。

道德的高さを子供の前に表示するこ云ふ事、隨て道德的高さに對する心のある一つの謙遜なる反應こ云ふものを子供に經驗させるこ云ふ事は、餘程難しい事であります。よくお話なんかの中で、色々昔の聖人なんかの話をして「本當に感心だな」こ言つたつて、實はよく子供には分らないのです。人間この關係は、自己この關係だけに於て生きるのでありまして、どんな聖人でも、私こ關係しない限りは實にあつさり閑こしたものでありまして、私は孔子樣がお一人いらつしやるのも有難いが、ヘッポコな奴でも、友達が澤山居るのが、どんなにか私には人生意義を持つて居るので、その孔子樣こ云ふものを私から切離したら、もう一つ一寸そこの所は分り難いのであります。所がこのかげで示す事の出來る作品があります。お蔭でその吾々が示さうこする文化價値の高さ……くれ〴〵も、そこへ子供を連れて來やうこするのでないけれども、その文化的價値の高さは持つて居る。これを示す事が出來ますから、こゝで藝術教育に於ては、道德教育や宗教教育よりもより的確に、高き文化に關する心的態度の經驗をさせる事が出來るのであります。道德の方では却々そこ迄行きませぬし、宗教でも却々そこ迄行きませぬけれども、藝術こ云ふ一つの作品を通してします時には、難しいもんだなこ云ふ觀念が分る分らぬこ云ふよりは、心的態度が出來るのであります。恰も自然の中に高い山があり青い空があり、何こ美しい輝かしい花がある、こ云ふのこ同じ樣な工合に、人類文化の中の特殊なる美を表現して居ります作品がこゝにありますから、玆で文化的價値の高さに對する心的經驗を起させる事が出來るのであります。

宗教なんかでもさうぢやありませぬでせうか。私は餘り立派に金ピカにがら〳〵しに居るお宮に行くよりも、實に質素なる白木のお宮に行つて、却つて崇高さを感ずる事が出來ます。けれども幼稚園の子供にこりまして、淸楚なるお堂に連れて行つても、後に存在する宗教的意義こ言つても分らない。だから宗教を大衆が感ずるのは、宗教家で、吾々を通して

考へるのであります。

さう云ふ事に較べて藝術作品と云ふものは、人類文化の高さの例に使ひ易いものであります。だからこの意味に於て藝術教育と云ふことの一面は、實に生活の中からスッと其方へのびて來る。而も餘りに早く分離する事を抑へて行くこそ、眞實なる藝術教育であると言ひ度い。そこまで行く僅かな生活を助長する事であるのでありますが、それも問題は、折角存在する作品を通して、人類の高さに對する信仰と云ふものは、藝術教育の特殊なものになるのであります。この後の場合に於てこゝに掲げられたものは、繪であります。

この繪を以て子供心に崇高な心を抱かせ、このきれいな繪の前では一寸靜かに歩け、と云つた樣な氣持で習はせた時に、繪と云ふものは要らぬものだ、藝術と云ふものは要らぬもんだと云ふ感じを子供に持たせる譯では御座いませぬ。その藝術と云ふ獨特なる作品文化を間違つて、人類文化的高さに對する經驗をさせるので、繪に關して感心させる所に止つて居るのではないのであります。これは非常に大事な事かと思ひます。

そこで嚴密に言へば、藝術作品を以て文化教育をして居るので、藝術作品をして居るのでないと云ふ樣な事にもなりませう。

(一〇)綜　括

これで私のお話は大體終りますが、一番初めに申しました如く、幼兒の教育は、幼稚園と云ふ中に於きましては、あの幼稚園と云ふ中で出來る事をするに止まる可きであつて、それを越ゆ可きでありませぬ。この意味に於て、心身を健全に發達し、善良なる性情を涵養する云ふ單純なるそこだけを幼稚園の目的と致して居ります。然し私は教育者であり、私は人間を教育して居るのであります。今は幼稚園の子供を教育して居りますが、その子の人間としての行先と云ふ事は、私

達は人間教育の立場から或文化價値を持つて居ります。その文化價値と幼兒との生活を如何なる關係に志向させて行くかと云ふ事は、考へなければならぬ問題であります。今日は、時に文化價値の高さをもこゝする教育が少い爲に、幼稚園と云ふものが餘りに平板的にあるんぢやないか。勿論これは、心身を健全に發達し、善良なる性情を涵養し、と云つた樣な幼稚園本體の素直な目的を理解しない程、その文化價値に子供を連れて行かうとする。今度逆にそこに出て行つて了ふ文化價値がなかつたならば、幼稚園と云ふものは餘りに平板なる、實に立體性の少ないものが來るんぢやないか。そこで文化價値として、道德と宗教と藝術を考へたのでありますが、それが自らみんな違つた趣きを持つて居ります。

斯う云ふ問題をまあこゝで考へたのでありまして、非常に暑い所を御勉强頂きまして、私は有難く御禮申します。

（をはり）

——ヨハンナ・スピリ原作——

ハイディ（第三回）

東京女子高等師範學校教授　津田芳雄譯

さうしてゐるうちにもう夕方になつた。すると、今度は古い樅の木にあたる山風の音が高くなつてきた。ハイディはそれを悅んで聽いてゐたが、やがて嬉しくて堪らなくなつたらしい。樅の木のまはりをスキップしたりダンスしたりして廻りだした。おぢいさんはそれをじつと小舍から眺めてゐた。

そこへ突然鋭い口笛が聞えた。ハイディはスキップを止め、おぢいさんも外へ出て見ると、上の山から山羊やペーテルが現れた。ハイディは聲をあげて喜び、跳んでいつて朝のお友達に次々と挨拶をした。それから、その中の一匹は白、一匹は鳶色の、美しい、すらりとした二匹の山羊が、おぢいさんの所へ駈けよつて手を嘗め始めた。これはおぢいさんが鹽を少し手に持つてゐたからで、おぢいさんは自分の山羊が歸つて來る時にはいつも鹽を手にして待つてゐるのであつた。ペーテルは間もなく、あとの山羊たちをつれて麓の村の方へと下りて行つた。ハイディは殘つた二匹の山羊に代る〳〵跳びついていつては、それをなで廻して悅んだ。

「おぢいさん、これうちの？二匹ともうちの？小舍に入れるの？。何時までもうちにゐるの？。」

ハイディがあんまり早口に色々なことを問掛けるので、おぢいさんは唯「さうだ、さうだ」と答へることが出來るだけであつた。山羊たちが鹽を嘗

めてしまふと、おぢいさんはハイディに「お椀とパンを持つておいで」と云つた。

ハイディがそれを持つて來ると、おぢいさんは白い山羊から、そのお椀に一杯、乳を搾(シボ)つて、パンを一きれ裂いて添へながら「さあ晩御飯だよ。それが終つたらおやすみ。よくおやすみよ。おぢいさんはこれから山羊を小舍に入れて來なければならんからね。それからお寢卷(チマキ)やなんか戸棚の一番下に這入つてゐるよ。デーテがそんな物の入つた包を今一つ置いて行つたからね。」

「おやすみ。おぢいさん、おやすみ」それから、おぢいさんや山羊たちを追掛けながら「山羊たちの名前、何ていふの、おぢいさん。山羊たちの名前は?」とハイディは叫んだ。

「白い方が白鳥でね、鳶色の方が小熊だ。」

とおぢいさんは答へた。ハイディは

「白鳥、おやすみ。小熊おやすみ」山羊たちはもう小舍に入つたので、今度は出るだけの高い聲を出してさう叫んだ。それから腰掛に腰を下して晩御飯を食べにかゝつた。けれども風が強くて吹き飛ばされさうだつたので、それもさつさとすましてて家に入り、寢床に上つた。そして間もなく絹の褥(シトネ)に包まれる姫樣のやうに、すや〳〵こいゝ心持に眠つてしまつた。

やがて、おぢいさんも、まだ暮れてしまはないうちに寢床に入つた。毎朝、日の出と一緒に起きることにしてゐるのに、夏の山の上の日の出は非常に早いからであつた。夜になると風が段々激しくなつて、家が震へたり、梁(ハリ)が鳴つたり、煙突をピュー〳〵吹き下す音や、樅の木の小枝がポキポキ折れる音など物凄く響いてきた。おぢいさんは「子供は怖いだらう」と云つて、夜中に起きあがつて、梯子をのぼり、ハイディの寢床の所へ行つて見た。

外では、黑い走り雲の間に、見えたり隱れたりしてゐた月が、丁度その時雲を離れて、圓窓から月の光が流れ込むやうにしてハイディの寢床を照した。見るとハイディは厚い薄團の下に體を被ふ

て、薔薇色の頰をしながら、小さい圓い腕の上に頭をのつけて、何か嬉しい夢でも見てゐるやうな顔して、すや〳〵と眠つてゐるではないか。おぢいさんは、月がまた雲に隱れて、何にも見えなくなるまでそれを眺め入つた。それから自分の寢床へもどつて行つたのだつた。

三、山羊と山へ

翌朝、ハイディはペーテルの高い口笛に眼をさまされた。枕もとの圓窓からはもう日が一杯さし込んでゐて、寢床も、枯草も、そのほか屋根裏ぢうのものが金色に光つてゐた。ハイディは吃驚してあたりを見廻しながら、此處はどこだらうと思つた。が、直ぐに外でおぢいさんの太い聲がするのを聞きつけて、山のおぢいさんの家に來てゐることに氣がついた。それから、昨日からの色んな珍しいことを思ひだして、今まで聾(ツンボ)のお婆さんに預けられて、街の狹苦しい家の中にばかりゐさせられたことゝ引くらべ、嬉しくて堪らなくなつた。早速、彼女は寢床から飛びだした。そして急いで着換へをし、梯子を下りて、家の外へ駈けだした。すると、そこにはもうペーテルが山羊たちをつれてゐて、おぢいさんは自分の二匹の山羊を小舍からつれ出してゐる所だつた。ハイディは駈けつけて行つて、おぢいさんやみんなに「お早う」を云つた。すると、おぢいさんがハイディに

「おまへ、山羊といつしよに山へ行くかね。」

と尋ねた。ハイディにはこんな願つたりかなつたりなことはなかつた。彼女は跳び立つて喜んで見せた。

「だが先づお顏でも洗つて、きれいにしないとお日樣に笑はれるよ。それ、あすこにみんな揃つてゐる。」

さう云つておぢいさんは家の入口にある水の一杯入つた盥と、そのそばに懸つたタオルの方を指して見せた。ハイディがそこへ行つて顏を洗つたり、首や腕を拭いたりして居るあひだに、おぢいさんはペーテルに辨當袋をもつて來るやうにと云つて家の中へ入つた。ペーテルは何するのかと思

ひながらそれをもつて行くと、おぢいさんはパンの大きなきれと、それと同じ位のチーズを入れてくれたので、ペーテルは眼をまるくした。

「まあ、あとはお椀を一つ入れるだけだ。あの子はおまへみたいに、乳首からぢかには飲めないから、お辨當の時に、このお椀に二杯ほど乳を搾つてやつてくれ。今日はおまへと一緒にあの子も行くんだ。岩から落つこちないやうに氣をつけてやるんだぞ、いゝか。」

そこへハイディがお日樣から笑はれないやうにと、さんざんこすつて蟹みたいに赤くなつてやつて來た。

「おぢいさん、もうお日樣、笑はないね。」

「もう大丈夫。さあ行つといで。」

ハイディは大悅びで山へ出かけた。昨夜の風で、雲はすつかり吹き拂はれて、頭の上には紺色の空がひろがり、その中から輝く太陽が、山の綠の斜面を一杯に照らしつけてゐた。そしてその斜面には、小さい青いコップや黃色いコップに見える花が數知れず開いてゐて、空の太陽の方へほゝゑみかけてゐた。ハイディはあちらに走り、こちらに走りして聲を立てゝ悅んだ。それも、こちらには赤い優しい櫻草が一面に咲いて居り、あちらには可愛いゝりんだうが青く光つて居り、その上手の方にはまた、柔い葉をした金色の木犀草が笑つてうなづいてゐたりしたのだから無理はない。ハイディはこの波打つてゐる色鮮やかな花の原に氣も心も奪はれて、ペーテルや山羊たちのことまで忘れてしまつた。彼女は美しい場所に目を引かれるまゝに、先に走つて進んだり、脇に外れたりしては、始終、花を手に一杯摘んで小さい前掛に入れ入れした。彼女はそれをみんな持つて歸つて、枯草にさして、自分の寢室をこの野原のやうに見せたい積りなのだつた。それでペーテルは油斷も隙もならなかつた。あまり速くも動かないその圓い眼が廻つてしまふ程、ひどい目にあつた。それに山羊共までハイディと同じやうな元氣を出して、勝手な方角へ走つて行くので、ペーテルはそれを

集めて行く爲に、始終口笛を鳴らしたり、大聲を出したり、杖を振つたりして追つて行かなければならなかつた。彼は少し怒つたやうに

「ハイディ！どーこ？」

と呼んだ。すると

「こゝよ。」

と、どこからか聲がするが、姿が見えない。ハイディは、匂ひのいゝうつぼぐさに蔽はれた低い丘の裾にゐるのだつた。そしてそこに坐つて花にうづもれながら、生れて初めて嗅ぐいゝ香りをのせた空氣を、胸一杯に吸ひ込んでゐるのだつた。

「こつちへ來いよ。岩からおつこちちやいけないと、アルムおぢさんが云つたよ」

ペーテルはまたさう叫んだ。

「岩はどこにあるの？」

ハイディは訊ね返した。けれども花の香りが風の一吹毎によくなつてくるやうな氣がして、席から立たうとはしない。

『あの上の方さ。まつすぐ上に行つた所だ。僕たちは、まだずつと先まで行かなくちやならのだよ。早くおいで。一番高い峯には大きな怖いみたいな鳥がゐて、鳴いてみせるよ。」

それを聞いてハイディは直ぐに立上り、花を一杯入れた前掛をかゝへながらペーテルの所へ駈けて來た。

「隨分こつたね。花をこりだしたら、きりがなくて、いつまでたつても此處から動けはしないよ。それに今日こつてしまつたら明日のが無くなつてしまふぢやないかみんなが。」

また登りはじめた時にペーテルがかう云ふと、ハイディもまた明日のが無くなるやうに摘んでしまつては本當にいけないと思つた。それに前掛ももう一杯で、それ以上這入らなくなつてゐたので、ハイディはそれからはペーテルのそばを離れなくなつた。山羊たちも上の方の好きな草の匂ひを嗅ぎだして、おとなしくさつさと登るやうになつた。ペーテルが普通、一日中山羊を遊ばせてゐた所は、高い岩山の麓になつた高臺めいた斜面の所で、そ

の高い岩山にも裾の方には藪や樅の木が一杯茂つてゐた。しかしこの高臺の一方の側には岩の深い裂目が幾つかあつて、おぢいさんが危いことを氣をつけさせたのも道理に思はれた。この休み場まで來ると、ペーテルは辨當袋を肩からおろして、それを地面の少し窪んだ所に大事に置いた。山の上は風が强いので、氣をつけないと大事の物を突風にさらはれて、とんでもない下まで吹き落されてしまふことになる。その邊のことはペーテルも心得たものだつた。それから彼はさすがに疲れてしまつて、溫い草の上にのび〳〵と寢そべつた。

同時にハイディも前掛をはづして、それで花をくるんで、ペーテルの辨當袋の脇の窪地に置いた。それから寢そべつたペーテルのそばに自分もごつかり坐り込んで、あたりの景色を見廻した。すると、谷はずつと下まで朝日を浴びてゐる。眞前には大きな雪の山が紺色の空に高く聳えてゐる。

左の方には岩又岩がそば立つてゐて、その兩側からまた、青空を突きぬくやうにして、高い高い峰が寄りつけない樣子で自分を見下してゐる。ハイディはこれらの景色に眺め入つて身動きもしなかつた。あたりはしいんとして、たゞ折々輕い風の音がして、青い花の小さい鈴や、木犀草の金色の冠がゆれて、その細い莖と一緒に陽氣にうなづいてゐるだけ。ペーテルは疲れて眠つてしまつたし、山羊は好き自由に上の方の藪の中を歩き廻つてゐる。ハイディは今までこれほど樂しい思ひをしたことはなかつた。彼女は金色の日光や、新鮮な空氣、花の匂ひやを吸ひ込んで、かうしてこゝにいつまでもゐることよりほかに、何にも望むことはなかつた。さうして時が過ぎて行くうちに、今まで何度となく下の谷から眺めたこれらの山々が、それ〴〵人のやうに顏を持つてゐて、知合でも見るやうに自分を見下してゐるのではないかと思はれて來た。そこへ突然耳を打つやうな鋭い聲が頭の上にしたので、驚いて眼をあげると、見たこともない程大きな鳥が、大きな翼をひろげて、空に輪を描きながら鳴いてゐるではないか。

「ペーテル、ペーテル。起きなさいよ。」

ハイディは叫んだ。「あれ御覽、大きな鳥がゐてよ。ほら、ほら。」

ペーテル呼びさまされて起き上り、一緒に鳥を眺めた。鳥はます〳〵高く舞ひあがつて、灰色の山の頂のむかふへ隱れてしまつた。

「鳥はどこへ行つたの。」

「巢に歸つたんだよ。」

「あんな高い所に巢があるの。すてきねぇ。なんだつてあんな聲をして鳴くのかしら。」

「鳴かずにゐられないからさ。」

「わたしたちも、あそこへ登つて行つて、巢を見つけない?。」

「おほー、おや、おや、山羊だつてあんな所まで登れやしないよ。それにアルムおぢさんが岩から落こちないやうにつて、云つたぢやないか」

それからペーテルが急に口笛を吹いたり、大聲に呼んだりしだした。ハイディには何のことか分らなかつたが、山羊たちはそれを聞きつけて、岩を跳び下りて、みんな綠の高臺の所へ集つて來た。そしてその山羊たちが、めい〳〵勝手に、相變らず水氣のある草の莖などをかぢつてゐたり、あちこち跳び廻つたり、角で突きあひつこをして巫山戲(フザケ)て見せたりするのだつた。

ハイディには山羊たちがそんなにして遊ぶのを見るのは初めてだつたので、自分も直ぐにとびだして行つて、その中に加はつた。そして一緒にじやれる時の面白さつたらなかつた。ハイディはもう山羊たちめい〳〵の癖が分つて、ひとりびとりのお友達みたいに見分けがついて、山羊たちみんなと仲好になつた。一方ペーテルは辨當袋を窪地から取出して、大きい方のパンとチーズをハイディの側に、小さい方のパンとチーズを自分の側に、二つ宛四角形に置き、白い山羊から乳をお椀に搾つて、それを四角形の眞中に置いてゐた。それからハイディを呼んだが、ハイディは新しいお仲間の元氣なあそびに夢中になつてゐて、ほかのことは何にも聞えも見えもしない。それでペーテ

ルは山羊を呼ぶよりも骨が折れた。けれども思ひ切つて、上の岩にこだまする程な大きな聲を出して呼んでみると、ハイディもやつと姿を現した。そしておいしさうにならべられた御馳走を見ると悅んでその廻をスキップして廻つた。

「お晝御飯だから跳び廻るのはよしな。坐つておあがり。」

ペーテルに云はれてハイディは坐つた。

「このお乳、わたしの？」

ハイディは、お椀を中心の飾にして、きれいに四角にならべられた御馳走をまた嬉しさうに見て尋ねた。

「さう。それから大きい方のパンとチーズも君のだよ。そしてその乳を飲んでしまつたら、もう一杯、白い山羊から搾つてあげるよ。さうしたら僕の番だ。」

「ペーテルのお乳はどの山羊からとるの？」

「僕の山羊からさ、あのぶちのだよ。だが、さつさとおあがりよ。」

「ハイディがお椀を手に取つてお乳を飲んで、それを空にして下に置くと、直ぐまたペーテルはそれに一杯注いでやつた。それからハイディは自分のパンを一きれ裂いて、殘りを、殘りと云つてもペーテルのパンよりは大きなパンのきれを、それに大きなチーズをそつくり添へて、ペーテルにさし出した。

「これ食べて。わたし澤山だから。」

ペーテルは驚いて口が利けなかつた。自分だつたら、自分の物をそんなに人にやるなんて、とても出來ないことだつたらうから。初めはハイディの云ふことが本當に思はれなくて躊躇してゐたが、ハイディがいつまでもさし出してゐて、おしまひにはそれを自分の膝の上に置いたりしたので、さては本氣かと思つて、それをもらつた。そしてうなづいて有難うをして、山羊飼ひになつてから一番のおいしいお辨當を食べた。その間、ハイディはまた山羊たちを頻りと眺めてゐた。

「山羊たちの名前をみんな教へてね。」

		定價	送料
倉橋惣三著 育ての心	東京、神田區駿河臺三丁目六 刀江書院	一、五〇	〇、一四
倉橋惣三著 幼稚園保育法眞諦	東京、神田區神保町一丁目六七 東洋圖書株式會社	二、五〇	〇、一六
倉橋惣三 新庄よしこ共著 日本幼稚園史	同上	三、八〇	〇、二〇
倉橋惣三著 幼稚園雜草	東京、日本橋區、大傳馬町 內田老鶴圃	二、五〇	〇、一四
日本幼稚園協會編 幼兒に聽かせるお話	同上	三、八〇	〇、一四
日本幼稚園協會編 幼兒の樂しむお話	同上	二、八〇	〇、一四
日本幼稚園協會編 幼兒發達檢査	東京、神田、神保町 フレーベル館	一、〇〇	〇、八
淡路圓次郎著 幼兒性行評定尺度	同上	一、〇〇	〇、二
倉橋惣三監修 保育叢書 菊池ふじの 德久孝子著 幼兒のための 人形芝居脚本	同上	一、〇〇	〇、二
及川ふみ著 幼稚園の手技製作	同上	一、〇〇	〇、二
膳眞規子著 自然物おもちや	同上	一、〇〇	〇、二
和田實著 實驗保育學	同上	一、〇〇	〇、二

日本幼稚園協會編輯　幼兒の教育

會長　東京女子高等師範學校長　下村壽一

主幹　東京女子高等師範學校教授　附屬幼稚園主事　倉橋惣三

日本幼稚園協會規則

第一條　本會ハ幼兒教育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第二條　本會ハ日本幼稚園協會ト稱ス

第三條　會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒教育ニ篤志ナルモノトス

第四條　會員ハ會費トシテ一ケ月金參拾五錢ヲ醵出スヘシ、會員ハ無料ニテ本會發行雜誌ノ配布ヲ受ケ又本會ノ事業ニ關シ諸種ノ便宜ヲ受ク

第五條　令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルトキハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルヘシ

第六條　幼稚園ニ關係アルモノニシテ本會ノ事業ノ爲ニ特ニ盡力ヲ與ヘラルヽモノニ請ヒテ地方委員トナスコトアルヘシ

第七條　本會ハ毎年一回總會ヲ開ク。但場合ニヨリ臨時休會スルコトヲ得

第八條　本會ハ左ノ事業ヲ行フ

一、幼兒教育ニ關スル研究及ヒ調査

一、幼兒教育ニ關スル講演會及ヒ講習會ノ開催

一、雜誌發行（毎月一回）

一、幼兒教育ニ關スル圖書刊行

一、保姆就職及招聘ニ關スル仲介

一、其他本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件

第九條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長　一名　會務ヲ總理ス

主幹　一名　會長ヲ補佐シテ會務ヲ掌理ス

幹事　若干名　會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス

評議員　若干名　重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ス

第十條　會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス

第十一條　主幹　幹事　評議員ハ二ケ年ヲ期シテ會長ヨリ推擧スルモノトス

第十二條　本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ル、コトアルヘシ

第十三條　本規則ハ總會出席會員ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラサレハ變更スルコトヲ得ス

幼兒の教育　第三十八卷　第三號

（外國行郵稅は一部金拾貳錢の割にて御拂込下さい）

昭和十三年三月十三日印刷納本

昭和十三年三月十五日發行

東京女子高等師範學校附屬幼稚園內　編輯兼發行者　倉橋惣三

東京市本郷區駒込林町百七十二番地　印刷者　柴山則常

東京市本郷區駒込林町百七十二番地　印刷所　合資會社杏林舍

東京市小石川區大塚町三十五　東京女子高等師範學校附屬幼稚園內　發行所　日本幼稚園協會

振替口座東京一七二六六番

定價

一ケ月分	金參拾五錢
送料	壹錢
半ケ年分	金貳圓拾錢
送料	共
一ケ年	金四圓貳拾錢
送料	共

廣告

特等面一頁	二等面一頁
金貳拾圓	金拾圓
一等面一頁	一頁以下
金拾五圓	御斷り

廣告社に御申込下さい　神田區駿河臺一ノ三　品田

不許複製　禁轉載

注文定規

一、本誌御注文の方は凡て前金（郵稅共）で願ひます。（郵券代用の場合には總て一割增）

一、御送金の場合はなるべく振替貯金で振替口座東京一七二六六番日本幼稚園協會宛に願ひます。

一、送金の節には第何卷第何月號より第何月號迄と明記せられたし。

一、本誌の代金に對しては別に領收證を差出しません。特に御入用の方は往復はがきで御申越を願ひます。

一、會費切又は前金切の際にはその最終發送の雜誌の帶封に「前金切」の印章を押捺いたしますから其節は早速御送金を願ひます。

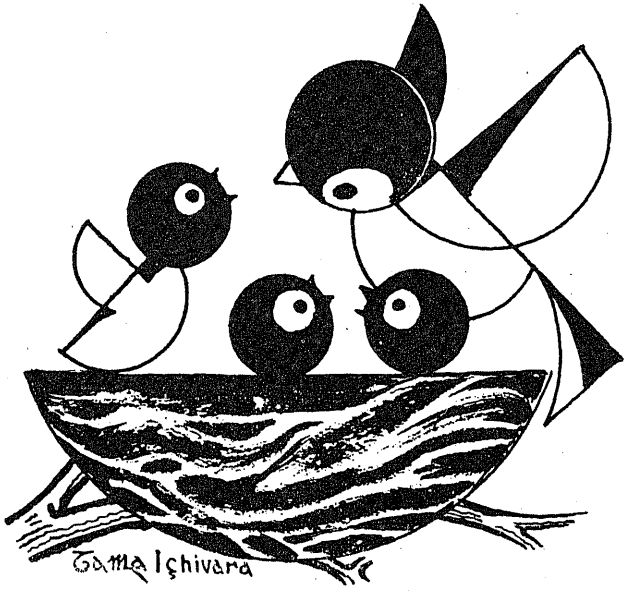
一、本誌の見本御入用の場合には前金參拾五錢發送を願ひます。

昭和四年五月十五日第三種郵便物認可
（毎月一回十五日發行）
昭和十三年三月十三日印刷納本
昭和十三年三月十五日發行

卒業園兒の記念品

保育修了園兒が母園へ記念品を寄贈する床しい企に就て、各地の幼稚園や保護者各位から記念品の選擇方をお問合せですが、これは永久に生命ある弊社製品が最も有意義で御座います。さてその好適の品々は

◇樂隊遊び用樂器一揃　二三圓
◇スモール・セット　二五圓
◇人形芝居一揃（舞台、人形、背景、脚本共）　五三圓
◇太鼓梯子　六五圓
◇鐵製二人乘ぶらんこ　六五圓
◇大型二十人乘シーソー　八五圓
◇子供の家（社會遊び）　九八圓
◇大型鐵製滑台　一一〇圓
◇波動廻轉塔　一二〇圓
◇コンビネーション運動具　一四〇圓
◇枠のぼり　一七〇圓
◇箱積木　一八〇圓



株式會社　フレーベル館

本社　東京・神田・町保二番(33)六六三二
出張所　大阪・東區・備後町五番(24)一九三八
電話　二八三七

定價三十五錢